

---

# 堕ちた魔王の理想郷

紅峰愁二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

堕ちた魔王の理想郷

### 【Nコード】

N9585V

### 【作者名】

紅峰愁二

### 【あらすじ】

三柱の神が見守る世界『ディオ・リナ』。その世界で強大な力を持った魔王が魔族だけの国を築いた。しかし、それを良く思わなかった人間たちの策略よって魔王の国は崩壊する。残党のみで魔王たちは戦いを挑むも、魔王の封印によって敗北を喫する。それから一年後、封印されていたシフィア王国の崩壊によって魔王は魂だけ封印から逃れることに成功した。人間に魂を宿し、新たな身体を手に入れた魔王は封印を完全に解くために動くも失敗に終わる。更に身体奪った人間は何と封印を施した姫の恋人で、国を追われたため一

緒に旅をすることによって……人間の身に堕ちた魔王の反逆が始まる。

## プロローグ

戦いが繰り広げられている。

シフィア王国の王城から轟音が絶えず響く。半壊した城には、床に家三軒分は並んで入れる大きさの穴が開いている。地下深くまで繋がった穴の中では、激戦が行われていた。

「人間如きが私の邪魔をするな！」

声を発したのは魔王だ。

眼前に魔法陣を展開し、目の前の敵を殺すための魔術を発動する。大樹のような太さで放たれた闇色の光が、目標へ真っ直ぐ貫かれる。しかし、魔術に長けた者なら迷わず逃げに徹するその攻撃は、あっさりと剣で両断される。

「だったらあんたが先に死になさいよっ！」

応えたのは、まだ成人にも満たない少女だ。一本の剣でたった一人で立ち向かい、魔王を足止め 追い込んでいる。

魔王の魔術を切り裂いてそのまま懐へ飛び込む。

「はあっ！」

「ぐあ……」

魔王は剣で胸を縦に斬られる。血が噴き出し、傷の深さを表す。重傷を負いながらも、次の攻撃に移ろうとした少女の体を魔王の巨体が掴んだ。

「調子に乗るな小娘が！」

魔王は少女を握る手に力を込める。ミシミシと嫌な音が漏れ、気を失う寸前の少女の手から剣が落ちる。

「十数年しか生きてない貴様に私が負ける道理はないのだ。何の野望もない小娘が……我が願いを阻むんじゃないっ！」

ありつたけの力で魔王は少女を地面に叩きつける。人間なら即死のそれを、少女はしっかりと両足で踏み込んで耐える。

「人間を滅ぼすことが野望　何て憐れなのかしら」

「……………」

「それに、わたしだって願うことはある。わたしは　みんなの平和を守る！」

少女は魔王に素手で殴りかかる。魔術で強化した拳を魔王に叩き返す。魔王はそれを腕を交差させて受けるも、勢いを殺せず壁まで吹き飛ばされる。

「……………ここまで、なのか……………」

もう魔術を作り出す魔力が尽きた魔王は、辛うじて肘を突いて地面から体を起こす。

「わたしもこれが限界みたい　だから、これで終わりにする」

少女が両腕を広げると足元に淡く光る魔法陣が浮かび上がる。徐々に光が増し、少女から魔王へと輝きが移る。それを見た魔王が驚愕に顔を歪める。

「取り上げるのか？ 私から仲間や国だけでなく、私自身でさえも！？」

魔王は発狂したように声を張り上げる。しかし、魔術は少しずつ完成していく。

「貴様らはどこまで傲慢なんだ。赦さん……赦さんぞ！」

「例え傲慢であろうとも あなたは負けたのよ。永い眠りに付きなさい。それが、あなたの報いよ」

「うおおおおおおおっ！」

魔王の身体が光を吸い上げるように石化していく。封印が完了した魔王は石造となって動かなくなった。

こうして、人間と魔王の戦いは終了した。

人間や魔族など、様々な種族が生活する世界『ディオ・リナ』。その世界で嘗て、魔王と呼ばれる存在がいた。

魔王はアスカンディナ地方の大陸の一角を占領すると同時に、そこに国を築き始めた。魔族だけが住まう魔族だけの理想郷。そんな国を目指して魔王は各地方の大陸に散らばる魔族たちを集めていった。国はあつという間に大きくなり、魔王の名前は大陸中に広がった。

争いのない平和な国で暮らしたい。

魔王と呼ばれる者には不釣合いな願いと共に建国された魔王国は、想い通りの国家へと日々近づいていった。

しかし、それも長く続かなかった。

人間による魔王国の制圧。それによって魔王国に住む魔族たちは

問答無用で駆逐された。

平和を望んだ魔王は同じ想いの同士を集めていたただだが、その行為は人間にとっては単なる脅威でしかない。魔王たちがいつか戦力を揃えて攻めてくると、疑心暗鬼になっていた人間たちの先走った行動は後に“大戦”と呼ばれる悲劇を呼んだ。魔王国を制圧してからも魔王を中心とした残党が併合した国々の軍を蹴散らし、各地に莫大な被害を齎した<sup>もたら</sup>。そして、魔王国に最も近いシフィア王国の国境内で魔族の進軍は止まり、決戦の舞台となったシフィア王城で魔王を封印するという形で大戦を終結させた。

シフィア王城の地下深くに魔王は嚴重に封印され、魔王国の残党も次々に大陸を追われていった。大戦のために集結した各国の軍に大きな損害、シフィア王国は王城と領内の一部を壊滅的な被害を受けた。

そうして魔王の脅威が去り、平和が訪れた。

それから、一年後

誰もが眠り込んでいる深夜。家の中は勿論、町の街頭も最低限のものしかない筈のその時間帯に、夜の空を赤々と照らす光があった。シフィア王国の首都にあるシフィア王城が燃えていた。全体の殆んどが炎に包まれ、王城は少しずつその姿を瓦礫と化していく。シフィア王国の象徴と言ってもいい王城の焼失は国の崩壊をも意味していた。太陽と月を示したシフィアの国旗が激しく揺れる姿は、まさにこの国の危機を表すようだ。

現在シフィア王国は攻撃を受けている。敵国はリブラーク帝国。一年前に魔王を倒すために手を取り合った国の一つだ。

大戦当時、首都と王城は魔王による襲撃で壊滅的な被害受け、一年経った今でも完全に復旧を終えていない。そのため、整備が完了していない隙をうまく突かれ、大勢の軍の侵入を許してしまった。

王城だけでなく、大戦で王と王妃が亡くなったことにより次期後継者の体制の交代もうまく済んでおらず、指揮が全体に思うように伝わらなかったため対応が遅れていた。それでもシフィア王国軍は屈しなかった。大戦による人員不足に負けず、その時培った精密な動きで生き残った少数の部隊が一角の道を防衛している。

「……これより先には絶対行かせるなよっ！」

部隊長の言葉に兵士たちは声を張り上げて応える。

その様子にリブラーク兵士が苛立つように言う。

「もう勝負は見えている。大人しく魔王を渡せ！」

怒涛と剣戟が響き合い、お互いが一步も譲らない。

そんな戦いが地上で行われている中、リブラークの最終目的である魔王封印の地も戦火を浴びていた。あらゆる場所に火の手が上がり、床の一面に軍服姿の人間の死体が沢山転がっている。大半がリブラークの軍服だが、シフィア軍の姿も所々ある。彼らは魔王を防衛していたシフィア兵と前の防衛線を突破してきたリブラーク兵だ。全員が同じような斬り傷を作って絶命している。

その中で二つの影だけがこの場所で立っていた。死体の山を気にかけることなく立ち尽くす二人はとても異質だ。

一人は女性で、短い金髪に派手な真紅のドレス風の格好をしている。背中に開いた綺麗な肌からは悪魔を連想させる翼が生え、髪の毛の隙間から角を覗かせていた。見ただけで魔族と解る彼女は今にも涙を流さんばかりに恍惚した目をもう一人の人物へと向ける。

もう一方は男性で、白を基調としたシフィア王国の軍服を纏っている。彼の軍服に付いた装飾からかなりの地位であると窺える。血を拭ってから両手の剣を鞘に戻す。それから手を、腕を、足を確かめるように動かす。そして、整った顔に不釣り合いな笑みを浮かべる。

その様子に魔族の女はついに涙を流し、彼の名を呟く。

「魔王様」

自身の使い魔の声に気づいて魔王は振り返る。人間の姿となつて復活した魔王は、以前との目線の高さの違いに若干の懐かしさを覚える。

「人間にしては悪くない身体だ。礼を言うぞ、セシリー」

「勿体ないお言葉です」

セシリーは膝を突いて言う。

「それに……わたくしは魔王様の魂しかお救いすることが出来ませんでした。本当に申し訳ありません」

「良い。私を封印した者のことを考えれば仕方のないことだ。よくやってくれた」

魔王は身体を向き直し、本来の自分を見上げる。

今の身体の三倍はあろう巨体がそこにあつた。憎悪に顔が歪み、封印された瞬間のままの姿で石化されている。肉体が安置された床と天井、壁に至るまでシフィア独特の魔術形式の封印が嚴重に施されていて今の魔王では手も足も出ない。

だが、魔王にとって現状は悪いことばかりではない。

「状況は上々……このまま肉体の封印も解いてしまおう」

セシリーの報告から地上の状況を知っていた魔王はほくそ笑んだ。今まで叶わなかった条件が今日この瞬間に揃った。

「では、行かれるんですね」

「ああ　姫を殺そう」

新たな決意と共に魔王は封印の広間を離れる。  
人間の姿にまで堕ちた魔王の反逆が始まる。

## 第1話：旅立ち

シフィア王城が陥落してから三日が経った。城はもう瓦礫の山としか言いようがない有り様で、代わりにリブラークの国旗が遠目でもはっきり確認できる程高々に掲げられていた。城が焼失する攻撃を受けたのに拘らず、その周辺都市の被害は微々たるものだ。そこがリブラークの腕の良さであり、シフィアがあっさり敵国の思うままに敗北した結果でもある。

そんなシフィア領内では、ある噂で持ち切りだった。

「姫様が殺されたって本当かな……?」

「城があんな状態だから有り得るかもな……」

「そんな……じゃあ、魔王はどうなるんだよ。姫様のお力でやっと封印できたっていうじゃないか」

「分からんよ。我々には何も……」

駐在しているリブラーク兵に聞こえないように村人がヒソヒソと話している。

その内容は、シフィアの姫の安否と現在の魔王の脅威。

自分たちよりも姫の心配をするあたりこの国での彼女の人望の高さはつきりと解る。というよりは、シフィアの民はそこまで自分たちの身に危険を感じていなかった。

理由はリブラーク帝国の過去の戦歴にある。リブラーク帝国という国は、過去に敵国を宣戦布告無しで攻め落とした経歴が何度もある。宣戦布告無しの戦争はただの略奪行為でしかない。しかし、リブラークはそうやって占領した国の民を絶対に故意に傷つけないのを信条にしていた。その証拠に、今回の戦いでも城以外の死者は無い。過去数回の占領を経験をしても民からの不満は意外にも少ない。寧ろ生活が豊かになったというところも存在するくらいだ。

現在のリブラーク兵の対応の良さにそれが真実であると民は実感する。それ故に、自身よりも姫の安否を気にするのだ。治安の悪い国なら未だしも、信頼ある王たちの元で暮らしてきた民としては複雑な気持ちなのだ。

滞在している村の様子に魔王は呟く。

「腰抜け共が……」

村人の話し声を聞いて魔王は苛立ちを隠せない。

「魔王様？」

心話でセシリーが声を掛けてくる。姿を見られただけで魔族と分かってしまったためセシリーは現在魔王の影に隠れている。

「何故自分たちの国が占領されたのにこうも落ち着けるのか私には理解できない」

「現状をはつきり認識していないのではないのでしょうか」

「現状を認識していない……」

魔王はセシリーの言葉に訝しむ。

「いくら政治に疎い連中でもこの状況を見れば明白だろう」

「魔王様。人間とは弱い生き物なのです」

セシリーは諭すように言う。

「ですから、自分自身を守るために、現実から背けてしまうものなのです。実際に敵国に占領を受けてもリブラークの過去の行いから“きつと今回も他国のように大丈夫”と自分を納得させているので

しょう。でなければ、不安で潰れてしまいます』  
「そういうものだろうか……」

大戦時では魔王国は一人の魔族が人間に殺されたのをきっかけに全員が立ち上がった。そのため、人間も最大戦力で挑まざる得なくなり、被害がより拡大していった。当時の魔族たちの行動が全て正しいと言いつもりはないが、現実逃避に明け暮れるこの国の民よりはまともだと魔王は思った。

『それに我々や軍の人間と違って戦うことに慣れていないと、やはりいざという時に動くのは難しいでしょう。戦いとは、平和に暮らす者にとっては恐怖そのものですから』

その通りだ、と魔王は思うが、どこか納得できない。崇める王を失ったかもしれないこの状況で何の行動も起こさない人間たちがとても信じられない。

『……魔王様。慌てる気持ちは解りますが今は冷静になってください。勝てる戦いも勝てなくなります』  
「わかつている」

セシリーに指摘されて更に苛立ちが増す。セシリーは何も間違ったことは言っていない。魔王は自分の不甲斐無さから冷静さを失っていた。

魔王は未だに人間の身体のままだ。

そのことが今の魔王の精神を大きく乱していた。魔王が肉体を奪った人間はどれだけ民衆に顔が知れているか判断できないため、現在頭をすっぱり隠す程深くコートに付いたフードを被っている。コソコソと人目をなるべく避けるようにして歩く姿はとても魔王と呼ばれる者の動きではない。

暫く歩くと、人気のない小屋の前まで来た。汚れは目立ち、今にも崩れそうだ。既に使われなくなつて数年経つたろう建物に逃亡する身である魔王には打つて付けの場所だった。

目的地に着いて魔王は入り口前で深呼吸する。相手に悟られないために自分自身を落ち着かせる。眉間に寄つた皺を無理矢理直して建て付けの悪い戸を開いた。

「おかえりー、クルス」

入ると共に緩い挨拶を貰う。声の主はこちらに顔を向けることなく白い地図のようなものを床に広げ、それをジッと睨んでいる。この国の軍の緊急連絡回線らしいが繋がったところを一度も見えていない。何度も見た光景だけに魔王はいつい溜め息をつく。

「まだやっているのか。いい加減に諦めたらどうだ」

「そんなのわからないじゃない。文句言うなら黙つててくれる」

「食事を持ってきたのだが……」

「もう！　そういうことは早く言ってくれなくちゃ！」

広げた道具を片付け、やっと顔を上げる。そこには魔王を今一番悩ませる顔があった。

肩に掛かる程の赤毛に、育ちの良さが伝わる白く綺麗な肌。魔王と同じコートを羽織っているが、その下には王族のみ着ることが許される装束を纏っている。魔王の仇敵クリスティーナ姫だ。ちなみにクルスとは魔王が奪つた身体を持ち主の名である。いつも通り平然を装ってクリスティーナに近づく。

「それで……何か解つたのか、クリスティーナ？」

持ってきた食事を床に並べながら魔王は訊ねる。

「・・・・・・・・」

しかしクリスティーナからの返答はない。不機嫌を隠そうともせず黙る。またか、と魔王は心の中で頭を抱える。

「成果はあったのか、クリス」

「別に・・・・・・・・いつも通りよ」

返事はあつたものの姫はご立腹のようだ。

「ねえ」

「なんだ？」

食事を口に含めながらクリスティーナは言う。行儀が悪いことの上ないが敢えて何も口を出さない。

「何でクリスって呼んでくれないの？」

クリスティーナは訊ねる。クリスティーナにとって当たり前の疑問に魔王は返答に困る。

クリスティーナと魔王が身体を奪った人間の関係は、幸か不幸か恋人だった。そして、二人だけの時クルスはクリスティーナを“クリス”と呼ぶ。似た名前から話すようになり、次第にお互い魅かれるようにこっそりと付き合っていた。肉体を奪った魔王にはクルスの記憶がしっかりと受け継がれている。だから、二人の間で記憶が食い違うことない。魔王自身が意識しない限り・・・・・・・・。

「何か口調も少し普段と違うし」

「これが私の普通だ」

「嘘よ！前はもつと砕けた話し方してたじゃない」

「ああ、随分と無理をしていたと自分でも思う」

「うそん!？」

突然の告白にクリスティーナは戸惑う。構わず魔王は続ける。

「私は農村の出身だ。だから上に行くためには他人より何倍も努力しなければならぬ」

「そ、そうね……」

王制度を取り入れている国では何事も貴族が優先されるのは最早常識だ。シフィアも例外でなく、実力が重視されるようになったのは近年である。

「そこでまず意識したのが言葉遣いだ。いくら実力で上り詰めても若者口調では示しつかない」

「……その割には随分と偉そうな話し方ね」

「村の連中に騙されたんだ。からかわれたと言ってもいい。気づいた時にはこの口調で定着していた」

「不憫ね……よく出世できたと褒めるべき？」

「運良く周りの人々に恵まれたからな。シフィアは貴族の中で平民を見下す連中は極一部だけだからよく助けられた」

「ふーん。そうなんだ」

あまり納得していない様子なので更に付け加える。

「クリスティーナと話す時は敢えて昔の口調に戻していた。自分としてはおかしくない常にか不安だったが、クリスティーナが砕けて話せていたと思っていたのなら大丈夫だったのだろう。この言葉遣いが不快ならいつもの口調に戻そう」

わざと諦めたような声と表情で言うと、姫はそれを首を大げさに振って否定する。

「い、いいよ！ 話しやすい方で。……そこまで嫌じゃないし」

「ありがとう。その言葉に甘えさせてもらっ」

魔王が内心ホッとすると、

「話し方は解ったわ。それで、何でクリスって呼んでくれないの？」  
再び難題が戻ってきて魔王は溜息をつきそうになるが、すんでのところで止める。

「お前は親しい者に全員クリスと呼ばせているな？」

敢えて強い口調で言うと、突然の態度にクリスティーナは戸惑う。

「呼ばせているってのは語弊ごへいがあるけれど……まあ、そうね」

「普段から姫や様を付けられることはあっても呼び捨てでクリスティーナと呼ぶ者は両親だけだったのではないか？」

クリスティーナはその人柄から周囲の交流が身分階級問わず広いクルスとの出会いもそんなクリスティーナだからこそあったと言っている。中には年齢の近い同性などもいて、生前のクルスのように愛称で慕っていた。

「これは私個人の願望

我が儘と言ってもいいが、クリスティ

「ナの中でも特別の存在でありたいと思っている」

「うん……」

「だから、誰もクリスティーナの名を愛称や敬称以外で呼ぶ者がいないのなら、私一人でそれを独占したい。だめだろうか……？」

一瞬、クリスティーナは驚いた顔をするが、

「そ、そんなことない！ 全然良いよ！」

魔王の言葉に興奮したように答える。クリスティーナは頬を染めながら、そっかそっか、と呟いていた。どうやらうまく誤魔化せたようだ。

「（誤魔化すだけで一苦労だな）」

うまく困難を乗り越えた魔王はクリスティーナに聞こえないように呟く。

『ノリノリに見えたのはわたくしだけでしょうか？』

「（気のせいだろう）」

疲れた目でクリスティーナを見る。

「えへへ」

クリスティーナは満足以上の結果にうつとりした表情で食事を再開した。

ドツと押し寄せた疲労に押し潰されそうになりながら魔王も食事を始める。味気のない食事だが今は贅沢は言えない。クリスティー

ナの方は先程の魔王の言葉が余程嬉しかったのか、幸せそうに食事をしている。

「とても国単位の組織に命を狙われている少女とは思えない。そもそもこの二人が一緒にいること自体が異例だった。」

封印から魂だけ開放されたあの日。魔王はクリステイーナを殺す筈だった。しかし、魔王が封印の地を出た時にはシフィア軍は既に壊滅状態で、たった一人で出会うリブラーク軍を次々に切り捨ててクリステイーナを探した。封印以前だったら有り得ないことだったが、人間と成り果てた魔王の体力はあつという間に限界にまで陥った。そして、いつまでも沸き続けるリブラーク兵士から窮地を救ったのがクリステイーナだ。そのまま魔王を封印した桁外れの戦闘力でリブラーク兵を蹴散らし、城外へ脱出。現在に至る。

クリステイーナを殺すのは簡単だ。だが、今殺せば魔王の身体がリブラークの手に落ちてしまう。人間一人の力では国を相手にできないのは先日身を持って痛感した。魔王の身体を取り戻す条件は、封印の地に確実にに行けることとクリステイーナの死亡だ。現在の魔王では後者は簡単でも前者が非常に困難である。だから、リブラークという国全体を揺るがくらのことをしなければならぬ。そのため」

「ヴァナデイス神殿国に助力を求めるのは本気なのか？」

クリステイーナに訊ねるとにやけ顔がなくなる。

「アスカンディナ地方で唯一中立を保っている国だからね」

ヴァナデイス神殿国はこの勢力にも味方しない中立国家だ。国同士の戦争の加担や魔族との対立など、争いごとには絶対に関わらない。先の大戦も例外でなく、アスカンディナ地方で唯一戦いに参加しなかった。その反面、飢餓や災害などの人為的でない事態には

協力的な国である。

「一方的にやられたとはいえ戦争だぞ。シフィアに加担するとは思えない」

「わたしがヴァナデイスに助力してもらうのは魔王の方よ」  
「ッ!？」

意外な内容に魔王は驚きを隠せない。

「クルスの言った通り戦争でシフィアはリブラークに奪われた。ヴァナデイスはきつとこれでは関与しないでしょうね。でも魔王は違う。魔王は今回のように争いの種となる。これなら動いてくれる筈よ」

「……………具体的にどうしてもらうつもりだ？」

「魔王の保護、もしくは破壊をもらう」

魔王は対応を迫られた。

クリスティーナの提案は大きな賭けだった。自分の身体と接触するチャンスであり、同時にヴァナデイスが勝手に作業をやることになればもう終わりだ。この提案が通らなくても、チャンスを待たなければならぬ。人間の寿命が百年前後である以上のんびりしてられない。

「……………そうするしかないだろうな」

「なら決まりね。今晚村人が寝静まってからここを発つわ」

「わかった……………」

これで話は終わり、とクリスティーナは食器を片付け始める。

『これで宜しかったのですか?』

セシリーが心配するように声をかけてくる。

「（今はこれ以外ないだろう。近隣の国を挑発して戦争を誘うこともこの人間の身体を使えば可能だろうが、クリステイーナがそれを許す筈がない。ヴァナデイスに着くまでに考える。お前も何か案を考えておいてくれ）」

『畏まりました』

さて、まずは無事にシフィアを出れるかどうかだな。

魔王は国境付近の地図を広げた。

## 第2話：旅立ち（2）

ヴァナデイス神殿国はシフィア王国から西へ真つ直ぐ五日程歩いて辿り着く場所にある。魔王たちはその間にあるルーニス王国を訪れていた。シフィアの国境を出てから既に五日経つが、ヴァナデイスまでまだ程遠い。人目を避けるために敢えて迂回しているとはいえ、まだ中間地点のルーニスにいるのはあまりにも遅過ぎる。

その原因はクリスティーナにあった。城生活の長いクリスティーナは如何に戦闘能力が飛び抜けていても、旅をするのはそこの商人の方がマシなくらい足手纏いだった。長期の徒歩に慣れてないせいで歩くペースが遅く、野宿も否定的で毎夜どこかの宿屋を探さなければならぬ。お陰で資金は底を尽き掛けていた。

「魔王様。頼まれたものを買ってまいりました」  
「ご苦労」

魔王はクリスティーナに悟られないよう気配を消したセシリーを部屋に招き入れる。魔族とバレないように魔王が渡したコートを脱ぎながら部屋に入ってくる。セシリーから頼んでおいたものを受け取り、満足気に頷く。

「悪くないな。これなら今よりはマシになるだろう」

セシリーが渡したのは女性ものの服と靴。クリスティーナのために態々町で買って来てもらったものだ。クリスティーナの格好は普段コートで隠していても、誰かに見られればそれだけで危険を伴う。シフィアの姫とまで判らなくとも高貴の出であることは子供でも気づけるのだ。

目立つことを避けたかった魔王はクリスティーナがシャワーを浴

びている内に服や靴などを金に替えていた。そのままではすぐに怪しまれるため、なるべく装飾は外してバラバラに売った。時間が経てば足が付くだろうが、今日一日くらいなら大丈夫だ。そして、十分な資金を確保できた魔王はそのお金で旅用の服と靴をセシリーに買ってきてもらおうように頼んだのだ。

「サイズの方も問題ありません。これで動きやすくなるでしょう」  
「助かる。女の服や靴など私には分からないからな」  
「こんなことでしたらいつもで仰って下さい」

セシリーが言うと、シャワー室から音がする。

「クルス？ 誰かいるの？」

セシリーが慌てて魔王の影に入る。その直後バスルームから濡れたままクリスティーナが顔だけ覗かせる。危ないところだった、と魔王は内心ひやひやししながら答える。

「別に誰もいないが？」  
「おっかしいなー。気のせいか……………」

クリスティーナは頭に巻いたタオルで髪を拭きながら部屋に入ってくる。たったそれだけの行動で魔王は激しく狼狽する。

「ななな、なな……………」  
「ななな？」

「何故服を着てこない!？」

クリスティーナは服を着ていなかった。裸ではないが、体をバスタオル一枚だけ巻いている姿は魔王が戸惑うのに十分だ。シャワー

を浴びている内に魔王自身がこっそり服を売買していたのだから当然のことだが、まさかタオル一枚だけで部屋に戻ってくるとは思わなかった。

「熱いし」

「熱かろうが服は着ろ。お前には羞恥というものがないのか！」

「部屋にいるのわたしただけだし」

「私が困ると言っている！」

魔王の様子にクリスティーナは首を傾げる。そして、ニヤツと口元を吊り上げる。

「もしかして照れてる？」

「そ、その格好は目のやり場に困る。それだけだ」

「胸を見れば良いと思うわよ」

「胸を………?」

言われるがままに魔王はクリスティーナの胸を見た。意外にも豊かな胸をしている。普段コートで隠れてたせいで気づかなかつたが着痩せするタイプのような。腰が括くれているのもあってより胸がより大きく見えて

「ってちがーう！」

「あつはは！ クルスってば可愛い！」

そこまで考えて魔王は頭を抱えて絶叫する。そんな魔王を見てクリスティーナは腹を抱えて笑う。

『魔王様。落ち着いてください。バスタオル姿が何だと言うのですか』

「（よく見る。濡れているせいでタオルがしつかり体に張り付いてる。体つきがこんなにもはつきり解るのは最早裸を見ているも同然だろう!?)」

『全然違うと思われませんが……………?』

「（何故だ!?)」

『例え全裸で在ろうとも、魔王様は堂々とすべきです。女性経験がお有りなのですからそこまで慌てなくても……………』

「（経験は……………確かにある。しかしそう慣れるものではないだろう? 小恥ずかしいというか……………）」

『今の魔王様はまるで乙女です』

セシリーの言葉に地味に傷ついて頂垂れると、丁度クリスティーナも笑うのを止めた。

「クルスがこんなにも奥手だとは思わなかった」

「この局面で襲い掛かる者がいれば、そいつは節操無しだ」

「これで節操無しって……………」

「何というか、雰囲気がかう、な……………」

自分でも何を言っているか解らなくなってきた魔王は必死に言葉を探す。そんな魔王を見たクリスティーナが悪戯を思いついた顔で近づく。そのまま、魔王をベットに押し倒した。

「なっ……………」

「これなら、雰囲気出る?」

クリスティーナが魔王に覆い被さる。お互いの顔の間が三十センチ程しかない。緊張しているのか顔が強張り、頬がバスルームから出た時よりも赤い。クリスティーナはその姿勢のままジッとこちらを見つめている。この先どうすればいいのか迷っているわけではな

く、魔王の反応を窺っているのだ。

「（……………セシリー。ここはどう対処すべきだ？）」

どうすればいいか冷静に判断できない魔王は自分の優秀な使い魔に助けを求める。

『抱きましよう』

「（セシリー！？）」

『魔王様。ここで手を出さなければ男が廃ります』

突き放されたような言葉だが、この状況ではそれが最善だと魔王でも思えた。ここで何もしなければ勇気を出したクリスティーナを傷つけることになる。今後一緒に旅をするのに当たって大きな影響が出る。しかし、魔王はクリスティーナの恋人の身体を使っているだけで、決して“クルス”ではない。何をするべきか解っているも理性がそれを許さない。

直視できなくなった魔王は視線を逸らす。左右どちらかに逸らせばいいものを魔王は視線を真下に向けた。そこで魔王は自分の失敗に気づく。目の先には大きな胸の谷間があつた。そして、まるで狙つたかのようなタイミングでタオルが開ける。<sup>はた</sup>

「ぶっ」

「『子供か！？』」

クリスティーナの裸体を見たと同時に鼻から血を噴いた魔王に女二人が厳しい突っ込みを入れる。魔王は鼻を押さえ、クリスティーナは突然の血にベットから飛び退いた。

服の袖で鼻血を拭くと既に血が出なくなっていた。出るのも突然なら止まるのも突然である。ホツとしながら顔を上げるとクリステ

イーナと目が合った。だがすぐに視線が外れる。

気まずい空気が出来上がっていた。クリスティーナはタオルを巻き直していたが、頬が赤いままだ。

「風邪引くといけないから服着るわね」

「ああ」

沈黙に絶えかねたクリスティーナはバスルームへ向かおうとする。その背中に魔王は声を掛ける。

「そつだ。服ならこれを着るといい」

「え？」

先程セシリーに買って来てもらった服をクリスティーナに差し出す。それをクリスティーナは驚いた表情で受け取る。

「これを……わたしに……?」

「さっき買ってきた。サイズの方は適当だったから合っているといのだが……ああ、これから寝るには少し窮屈か」

「うっん。そんなことない」

そう言うつてはに cand 顔を隠すように渡した服を抱きしめる。

「早速着てみていい？」

「ああ」

クリスティーナがバスルームへ駆け込む。そして、すぐに出てくる。

「どつ? 似合う?」

旅のために選んだ服だが、クリスティーナにはとても似合っていた。

クリスティーナが着ているのは普通の市場で売られている服だ。動きやすさを重視し、尚且つ一般人に溶け込めるよう敢えて一般で売られている服を見繕った。値が安い割りに素材が良いため長旅でも持つだろう。靴の方も荒道でも対応できるブーツを選んだから明日は今まで以上に早く目的地に近づける筈だ。

「ああ。良く似合っている」

「えへへ」

たったそれだけで機嫌を元に戻したクリスティーナに魔王は安堵する。

「そつえばさ」

クリスティーナが思い出したかのように言う。

「前着てたわたしの服知らない？ さつきから見当たらないんだけど」

キョロキョロと辺りを見渡すクリスティーナに魔王は告げる。

「あれなら売ったぞ」

「売った!？」

クリスティーナの目が驚愕で見開かれる。今度は怒りで顔が真っ赤になる。

「な、何で売ったのよ？」

震える声でクリスティーナは訊ねてきた。何を怒っているのか解らず魔王は素直に答える。

「資金が付き掛けていた。だから金が必要だった」

「だからってわたしの服を売らなくてもいいじゃない！」

「安心しろ。一日で足が付くようなへマはしていない」

「そういうことじゃなくて……」

苛立った声でクリスティーナは言う。

「せめて売る前に一言言ってくればいいのに」

「それはすまなかった。今買出しにいかなければ市場は閉めてしま  
うだろうし、何事もなく明日の朝を迎えられるとは限らないから少  
々焦っていた」

「それはそうだけど……」

言いたいことは解るが納得が出来ないといった顔をする。

魔王はクリスティーナの対応に訝しんだ。今の説明は理由がしつ  
かりとした内容なのに納得いかないというのはどうことなのか。仕  
方がない、と魔王は更に説明を付け加える。

「それに今泊まっている宿も引き払う金が朝までに必要だったわけ  
で」

「もうわかったわよ」

魔王の説明を遮り、クリスティーナが疲れたようにベットに倒れ  
込む。枕に顔を押し付けた姿勢のまま言う。

「疲れたから寝る」

「……そうか。なら私はシャワーを浴びるとしよう」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

クリステイーナの背中を見ても不機嫌なのがよく解る。クルスの記憶でもその原因を知ることが出来ない。

何がいけなかったのだろうか。

魔王には最後まで解らなかった。

### 第3話：旅立ち（3）

朝食を済ませ、泊まった宿を発ってから五時間ほど経過した。

全く変わらぬ景色にクリステイーナは溜息をついた。思いのほか大きかったのかクルスが振り向いてくる。

「もう疲れたのか？」

「ううん。そんなことはないよ」

「そうか」

軽く言ってからクルスは手にした紙に向き直る。クルスが見ているのは、昨日泊まった町で購入したルーニス王国の地図だ。

二人は現在、ルーニスの国境内の山地にいる。人目を避けながら通るには最高の場所で、山に生えた木々がルーニス本来の道から二人を覆い隠してくれる。しかし当然ながら人が通るための道ではないため、自然のままの大地を木々の間を縫うようにして進まざる得ない状況だ。そのせいで体力は平地を歩くより多く必要とする。それでもクリステイーナが未だに音を上げずに歩き続けことが出来るのは、クルスに買って貰った服と靴のお陰だ。体力が付いてきたのも事実だが、それ以上に体が動かし易い。服は基より、靴が荒道でも足を取られることがなく、山道という環境でも普通に対応してくれる。

本当なら喜ぶべきことだがクリステイーナの表情は暗い。心が晴れないのは昨晚のクルスの行動にあった。

昨晚の出来事は正直頭にきたが、一晚経てば流石に気持ちが悪く落ちてきた。王族として身に纏っていた装束は、背負っている剣を除いて唯一のシフィアでの持ち物だ。金銭面で当てのないクリステイーナとしてはいつか資金にする覚悟はあったが、シャワー中にこっそり売られることになるとは予想できなかった。突然の“彼”ら

しくない行動にクリステイナは疑念を抱く。思えば、城と一緒に出てからおかしな点はいくつもあった。状況が状況だけに気のせいと感じていたが、それも限界がきていた。

これがクルスの本当の姿なのかな。それともわたしが我が儘なのかな……。

王城で過ごしたクルスとの思い出は楽しいことばかりだった。性格から意見が食い違うこともあったが、今回のような気持ちは初めてだ。

現在の状況にクリステイナは本音を言うと、嬉しかった。リブラークによってシフィアは無くなったが、そこで暮らす民は変わらず平和のままだ。逃走の際に立ち寄った村の様子からも、自分たちが無事なら王が誰でも構わないのが解る。平和なら、民が幸せに暮らせるなら、それで良い、とクリステイナは思う。王として民を守るために幼少から政治の勉強は勿論、剣や魔法の腕を磨いてきた。そのことに疑問を抱いたことはないし、それが正しく自分の目指すものだとは必死に頑張ってきた。

しかし、一人の女の子としては耐えられないことだった。王である以上、好きな男性と結婚できる可能性は低く、相手が特別な家柄の出でないなら尚更だ。それではクルスと結ばれることなど出来ない。そのことがクリステイナの　王としての心残りだった。当時は、クルスと幸せになりたい気持ちが強くなる一方、どこか諦めた感じになる自分に嫌気が差していた。そして、シフィアが失われた今、クルスと共にこうして旅をしている。旅の目的が違えど、夢が叶ったと言っても過言ではない。

二人の距離は三步程しかない。最初は並んで歩いてしたが、現在はクルスが少し先行している形となっている。クリステイナの歩く速度が遅いのが原因だが、恋人の距離としては遠過ぎる。追いつきたくてもこれ以上足がいうことをきかない。今の距離を維持するだけで精一杯だ。クルスはそんなクリステイナの心境に気づくことなく歩き続ける。地図に目を向けるばかりでこちらに気かけよ

うともしない。

わたしは夢を見てるのかしら。現実の恋って結局こんなものなのかな………？

クルスへの疑問から今度は自分の常識を疑い始める。もう自分が何を考えているか解らなくなり、頭の中がぼうつとする。そして、そのまま体がぐらつと傾く。

「あれ………」

情けない声を漏らしながらクリスティーナは体のバランスを崩す。同時に、誰かに支えられる。

「大丈夫か？」

支えたのは当然ながらクルスだ。クリスティーナの肩を抱きながら、もう一方の腕で額に触れる。

「軽い熱中症だな。少し休もう。丁度良いところを見つけたところだ」

「気にしなくていいから………わたしなら大丈夫よ」

「私が休みたいんだ。悪いが付き合ってくれ」

抵抗を試みたクリスティーナだが、クルスに軽く流される。それが彼なりの優しさだと知っているクリスティーナは微妙な気持ちで頷く。

やや強引にクリスティーナはクルスに引っ張られ山の奥へと進む。すると、木々で生い茂っていた場所の一角が切り開かれているのが見える。正確には自然によって広がった空間がそこにあった。

「池？」

「ああ。丁度日陰もあつて休むには絶好の場所だ」

木々に囲まれるように池があつた。

クリスティーナは近くの木に凭もたれながら腰を掛ける。日陰に入り、ぼうつとした頭が徐々に落ち着くの解る。風も流れてきて更に涼しくなる。その涼しさを感じながら目を閉じていると、頬に冷たいものが当たる。「ひゃあ」と恥ずかしい声を上げると、目の前に水筒が差し出される。

「水だ。汲んだばかりだから良く冷えているぞ」

「あ、ありがとう」

お礼を言つて水筒に口をつける。クルスの言う通りよく冷えていて喉が潤う。飲み終えて水筒をクルスに渡すと、そのままクリスティーナの口にしたところで水を飲む。

「あ………」

たったそれだけで何だか不思議な気持ちになる。クルスはそれに気づくことなくお腹を擦る。

「少し小腹が空いてきたな。これなら町で何か買つておけば良かった」

「それなら良いのがあるわよ」

クリスティーナはリュックから包みを取り出す。包みを広げると中には沢山のイチゴがあつた。包み一杯に納まったイチゴをクルスは物欲しそうに凝視する。クルスの好物なのだ。

クリスティーナはその内の一つをクルスに差し出す。

「またそんな無駄なものを買って……」

「いらなの？」

「捨てるのは勿体からな」

言い訳するように言いながら、クルスはクリスティーナからイチゴを受け取って口に放り込む。そして包みから一つ、また一つとイチゴを取っていく。頬が緩んだ顔で幸せそうに食べる姿は子供っぽくて可愛い、とクリスティーナはこっそり思いながら自分もイチゴを食べる。甘くてうまい。

沢山あったイチゴはあっという間になくなり、クリスティーナは包みをリュックに仕舞った。お腹も膨れて少し眠くなる。このままここで昼寝でもしてしまいたいという衝動に駆られる。ふと、クルスの方を見ると難しそうな顔をしていた。

「どうかしたの？」

「いや、今後のことを考えていた」

「何か気になることでもあった？」

「気にするな。クリスティーナの心配することではない」

そう言っただけクルスは荷造りを始める。クルスが気にするなと言うなら本当にそうなのだろう。しかしクリスティーナにとっては良い機会だと思った。そして思い切って訊ねる。

「クルスは、さ。今後のことをどうしたいと思ってるの？」

「そういうクリスティーナはどうしたいと思ってるんだ」

質問に質問で返される。

軽く流された気持ちだが、こちらの意見を伝えるのも重要なので、敢えて気にしないことにした。

「わたしとしてはシフィアは正直どうでもいい。国を取り戻したいとか、リブラークに復讐したいとか……が普通なんだろうけど、どうもそういう考えはわたしには無理みたい」

「それなら一体どういう」

「わたしはみんなが平和ならそれでいいの。まあ、リブラークのやり方は気に食わないけどさ。最終的にそこで暮らす人たちが幸せなら、わたしが頑張る意味なんてないな、ってね」

「……」

「気掛かりなのは魔王だけ。あれはわたしがやらないといけないから。ただ、それだけ！」

クリスティーナは自分の思うままの言葉で言い切った。この気持ちに嘘はない。クリスティーナの心から望むことだ。魔王の件が終わった後のことはまだ考えていない。クルスと二人でずっと暮らせたら　と夢は見るが今は魔王を優先している。

話を聞いていたクルスの表情はやや暗い。

「王として失格よね」

「……そうだな。しかしその考えは個人的に悪くない」

「そ、そう？」

クルスに言われると何だかこそばゆい。少しだが、クリスティーナは自分の考えに自信が持てた。

「だが私には賛同しかねる部分もある」

「え？」

認められたと思った矢先のことにクリスティーナは困惑する。クルスの表情も険しくなりクリスティーナは動揺を隠せない。

「やはり私は憎いよ。油断すればすぐにでも復讐したい衝動に駆られてしまう」

「クルス……」

「仲間が大勢死んだんだ」

クルスが搾り出すように呟く。

「助けられる命が沢山あった。それも目の前で！ しかし私が未熟だったばかりに誰も助からなかった。次々に仲間は私のすぐ隣で死に、生き残っている者も容赦なく刃を向けられ殺された。……・最後は、自分自身すら守ることも出来なかった」

クリスティーナは思い出す。

クルスはクリスティーナが駆けつけた時には既に一人でリブラーク兵たちと戦っていた。それは仲間が死んで孤立したからに他ならない。クリスティーナが偶然その場に遭遇しなければ、今ここにクルスはいないだろう。

仲間が死に、自分だけが助かったことにクルスは負い目を感じている。シヨックだったに違いない。目の前で何人も仲間が死に逝く中、自分だけに救いの手が差し伸べられたのだ。いくら平気を装っていても、何も感じていない筈がない。

それをクリスティーナは今更ながら気づく。そんなこと、少し考えれば分かることなのに……

クルスがそんな風に思ってるなんて……考えもしなかった。

クリスティーナは城を出てからずっと自分ことばかり考えていた。クルスがいつものように相手にしてくれないことを怒ったり、冷たい態度に不審を抱いたり、と自分勝手にも程がある。それをクリスティーナは痛感していた。

あの日から、クルスは苦しんでいた。それでもクリスティーナに

気づかれないようにしながらずっと近くで支えてくれた。いつものクルスらしくない行動は、そんな彼の精神的な疲労からのものだろう。

クルスの目から涙が零れる。

「何故私を助けたんだ。殺してくれれば 放って置いてくれれば 楽になれただろうに……」

それは城を抜け出してから始めての愚痴だった。

そしてクルスの苦悩そのものだった。

クリスティーナはクルスに手を伸ばす。殆んど無意識に伸ばした両手でクルスを自分の胸元に抱き寄せる。

「……ごめん。無神経なこと言って」

自然とクリスティーナの涙腺もゆるくなる。それでも泣かないように今の想いを伝える。

「ずっと苦しんでるのに気づけなくてごめん。わたし、自分のことばかり考えてた」

「そんなことはない。クリスティーナだって苦しんでいただろう」

「ううん。クルスはわたしを支えてくれた。でもわたしは何もしてあげられなかった」

「イチゴはうまかった」

「あはは…… たったそれだけしか出来なかったけどね」

クルスの髪を擦りながらクリスティーナは言う。

「今度はわたしが支える。だから、これだけは言わせて」「なんだ？」

「これはわたしの我が儘。でも本心からの願いよ。もう、自分で自分を殺すようなことは言わないで」

「……」

「どんな形でも良いから生きていて」

微かにクルスの体が震える。嗚咽が漏れる。それを必死に隠そうとするのが解る。

十秒程待つてクルスから出た返事はたった一言。

「もう少しだけ、こうさせてくれ」

「ええ」

返事になってない答えだが、クリスティーナはそれを受け入れた。子供をあやすようにクルスの頭を胸で抱きながらついに自分も涙を零す。

暫く、二人は静かに泣いた。

## 第4話：天使

太陽が沈み、辺りが真っ暗になった。月明かりのみを頼りに魔王たちは夜の山を歩く。

夜の山は危険なのは承知だが、魔王たちには歩みを止めない理由があった。

まずは休める場所が確保できないこと。慣れない地理のせいで地図を眺めても全く分からない。荒れた道なき道を通っているため、中々野宿できる場所が見つからない。そしてもう一つの理由は、歩みを止めて顔を合わせるのが気まじかったからだ。

昼間のことを思い出し、羞恥だけで死ぬるのではないか、と魔王は苦悶する。

「（セシリー。寝る場所を確保した後、クリスティーナとどう対話するべきだ？）」

『普通に話せば良いかと』

「（気まじくて顔を合わせ辛い）」

『それなら、気まじさを忘れるような話題を提供して距離感を戻しましょう』

「（小粋なジョークか？）」

『それは止めた方が良いかと……』

そんなやり取りをしている内に今まで歩いてきた荒道が嘘のような平地に出た。

明らかに開拓された形跡のある場所で、切り倒された木々の一部が端に積まれていた。馬車など道幅を多く必要とするものが余裕で通れる程広い。そういう切り開かれ方をされていることから、ここで新しい道路でも開発を行っていたのかもしれない。

しかし、直進するように作られた平地は雑草などで生い茂ってい

た。人工的なものでなく自然に生えた草だ。積まれた木々も暗くて判り難いが朽ちている。放棄されてから長い時が経っている証拠だ。

『こんな場所に開拓地？ この辺りに何かあったでしょうか』

「何も無い。自然の広がった場所が続いているだけだ。最近の地図を購入したから間違いない」

『だとしたら一体……』

「（分からん。しかし最近まで人が手を加えた様子がないなら、一晩ここで野営しても問題はないだろう）」

魔王はまだそれ程朽ちていない木に腰掛ける。そのままクリステイーナに向き直る。

「今日はここで休もう。ベットで寝ることはできないが今回は我慢してくれ」

「うん。わかった」

クリステイーナは何事もなく魔王の横に座る。その様子に魔王は困惑する。

「（何故クリステイーナは普通にいられるんだ）」

『何故と言われましても、気にしているのは魔王様だけです』

「（ふむ……）」

そうなのか、とやや納得しかねながらも受け入れる。

魔王は肩を揉む。重いリュックを背負っていたせいで肩が痛い。

隣のクリステイーナは伸びをして身体をほぐしている。お互いに疲れが溜まっていた。

「今日はもう寝よう」

「早いわね」

「いつもと違って軟らかい布団で寝れるわけではない。野宿で休息するのも限界がある。だからその分睡眠を取っておく」

「ベットで寝れないのもそうだけれど、シャワーがないのも辛いわね」

「そこは次の町まで辛抱してくれ。今の我々に水は貴重だ」

立ち寄った池で水は十分に確保したが、温存しておくに越したことはない。例え余裕があつたとしても、見知らぬ地で旅をする以上身体を洗うために使うのは危険だ。女としては男より汗の臭いなど気になるだろうが、ここは耐えてもらうしかあるまい。

魔王とクリスティーナは早速野営の準備を始める。

すると、クリスティーナがいきなり剣に手を伸ばす。

「クルス！」

『魔王様！』

二人の叫ぶ声と共に魔王はクリスティーナに蹴り飛ばされる。同時に魔王がさつきまでいた場所が吹き飛んだ。

「攻撃！？ どこから？」

「あそこ！」

クリスティーナが指した場所を見る。そこには魔王たちから十メートル程離れた場所に剣を携えた者が一人いた。

一人、と表現するのは間違いかもしれない。その者は明らかに人でない威光を放っていた。

大きく広げられた翼は月明かりを受けて白く輝き、見る者を圧倒する。闇夜でも判る紅い鎧は頭から足まで余すことなく包まれている。頭上に浮いた光の輪はその者の純粹さを示す。そんな姿をした

存在を、魔王は一つしか知らなかった。

「 天使」

「え!？」

魔王の呟きにクリステイナーも驚きを隠せない。

天使とは、世界で唯一神の僕として認められた存在である。神の傍に仕え、神のためだけに生きる種族。例外もあるが、本来なら墮天でもしない限り『ディオ・リナ』に出現する筈がない。

しかしそれが目の前にいる。それ故に魔王は齒噛みする。

どうして気づけなかった。

天使は見れば解るが、強大な存在である。気配なら例え隠していても本来の魔王ならすぐに看破しただろう。それだけで魔王が奪った身体が魔術に向いていないのか解る。使い魔であるセシリーでも察知できたのだから明白だ。

悔しい気持ちを抑えながら魔王は敵を分析する。

穢れの無さを表した天使の輪に、純白の翼。神の従属を示す汚れない鎧。そして、その鎧の色が意味するのは

「第五位天使 ヴァーチユース 力天使か」

「分かるのですか」

初めて天使が口を開く。兜から無表情な顔が覗けた。その顔は男にも女にも見えるが、声から察するに男性だろう。

天使が纏う鎧には意味がある。自分の身を守るための防具であると同時に、階級を色で見分けられるために使われる。そのため今回現れた天使の鎧の色から魔王はすぐに力天使だと判った。

「現代では『ディオ・リナ』で天使について知る者は時が経つにつれて減ってきているというのに……感心しました」

「私にとっては常識に等しい」

「ほう　ならば、『ウィルフレド・イマ』での力天使の立場をご存知ですか？」

『ウィルフレド・イマ』とは、『ディオ・リナ』を管理する神々と天使が住まう世界だ。たった三柱の神とそれに従う天使のみが暮らすその世界は、『ディオ・リナ』で生活する魔王には未知の場所だ。

しかし魔王は悩むことなく問い掛けに答える。

「天使の階級としては五位に数えられるが、神に仕える天使としては二番手の扱いとなっている」

「何故？」

「第一位から第三位の上級天使が神ですら力を持って余す存在だからだ。力が有り過ぎる故に実体も理性を持たず、力の塊と化している」  
「付け足すなら、実体と理性を持てば神をも凌駕する存在となり兼ねないからです」

「だから今でも上級天使は『ウィルフレド・イマ』で幽閉されている。もつとも、奴らには幽閉されている自覚すらないだろうがな」  
「その通りです」

天使の情報はある程度なら魔王は熟知している。

だからこそ解らなかつた。何故神に仕えている筈の天使が目の前にいるのか。魔王は一つの結論を口にする。

「お前はローレンツェルの天使なのか？」

ローレンツェルの天使。

それはローレンツェルと呼ばれる人間によって放置された大聖堂を拠点としている墮天使の集団だ。『ウィルフレド・イマ』から追

い出された墮天使たちは『ディオ・リナ』に移り住み、ローレンツエルに籠っているという。魔王でも詳しく知っているわけではないが、この天使たちの大きな特徴として、彼らには仕える神がない。それ故に自由に行動が出来る。

「違います。彼らと勘違いされるのは不快です」

天使は首を振って否定する。魔王も解っていただけに嫌な気持ちを隠せない。

天使が墮天すれば、頭の輪と翼が黒く染まる。中には容姿すら変わる者もいるという。しかし目の前の天使にはどれも当てはまらない。それがどういう意味か魔王は理解しているが、信じたくない気持ち強い。

「だったら何しに来た？ 神学でもご教授してくれるのか？」

「それも違います。．．．いや、そうであったなら良かったのですが」

「？」

「私をお気になさるのは当然のこと。しかしお連れ様の方にも気を使うべきだと忠告します。．．．もう、遅いかもしれませんが」

「何．．．．．？」

天使に言われるがままにクリステーナの方へ顔を向ける。

クリステーナはどこか怯えたような表情で魔王を見ていた。心配になって一歩近づくとクリステーナも一歩下がった。どう見てもいつもと様子がおかしい。

魔王が何が起こったのか理解できないままでいると、セシリーから心話で声を掛けられる。

『……魔王様』

「（クリステイーナに何があった？）」

『喋り過ぎです』

「（何をだ？）」

『お忘れですか。天使については、魔王様だから知り得たことなのです。……“人間クルス”には決して知り得ないことなのです』

「（……）」

魔王は絶句する。

当たり前のように天使と会話していたが、その内容は普通なら知ることすら難しいことだ。『ディオ・リナ』と『ウィルフレド・イマ』の二つの世界に交流がない以上、その情報を得るには先祖より語り継がれるか、専門の学者でもない限り決して知ることが出来ない。魔王は、“魔王”だったからこそ識っていたのだ。

魔王が奪った身体の主は平民の出身だ。古くから先人より何か受け継がれているわけでも、専門の学者に知人がいるわけでもない。それは、身体を奪った魔王が一番良く知っていることだった。

「ねえ、何でクルスがそんなに天使について詳しいの……？」

クリステイーナの疑問は尤も<sup>もっと</sup>だった。当然ながら今口にした情報は、シフィアの王であるクリステイーナですら分からない内容だ。それを一騎士が日常会話のように話していれば不審に思うのも無理はない。

「答えは簡単ですよ。クリステイーナ様」

十メートル以上もある距離を一瞬で詰めた天使が手にした剣を魔

王に振り下ろす。

「クルス！」

魔王はクリステイナーの声に関係なく反射的に剣を抜いていた。辛うじて防いだものの、たった一撃で腕を痺れる感覚が襲う。反撃することも出来ず、罅<sup>つは</sup>迫り合いになる。徐々に押され、主導権を相手に持っていかれる。

「二刀流ですか。使いこなすには相当の修練が必要だったでしょう。……あなたが本物なら」  
「うるさい！」

魔王はごり押しで天使の剣を弾く。そのまま天使に斬り掛かる。魔王の今の剣術は奪った身体の主が習得した技だ。それを魔王が人間クルスの記憶から学び、元々身体が憶えていた感覚を利用して戦っている。しかし知識として二刀流を熟知していても、体を動かす以上それだけでは意味がない。本来、剣すら触れることのなかった魔王が慣れない剣術をこなしているのは単なる勘に過ぎない。学んだ剣術と“なんとなく馴染みのある”動きで剣を振っている。そのため、必ずと言っていいくらい抜け目がある。そこを魔王の影に入ったセシリーにクリステイナーに分からない程度の魔術で補助してもらっている。

魔王の本来の戦闘スタイルとしては魔術を行使して戦うものだ。だが現在の魔王には魔術が使えない。それは、魔王が奪った身体に魔力が全く備わっていなかったからだ。

魔術師の強弱は習得した魔術の数と魔力の高さで決まる。魔術は剣術と違い、修練すれば誰にでも扱える技というわけではない。確かに才能が必要なものだ。突然魔術の才が開花する者もいれば、古くからの血筋によって受け継がれる者と二つのパターンがある。前

者は魔王で、後者はクリスティーナに当たる。

そして、魔王は魔術に長けた者の中でも最たる者だ。莫大な魔力を体内に保持し、あらゆる魔術式を操る魔王は魔術に置いて最強と言っても過言はない。それも昔の話で、強大な魔力の備わった身体は封印されてしまったため、あらゆる魔術の行使する方法を知っていても発動させることが出来ない。

今ではセシリーのサポートでやっと天使の動きについていけるのが限界だ。

使い手と同じく汚れない白い剣が魔王を襲う。

「良い動きです。それを失うことになるとは……とても残念です」

「思う通りに行くと思うなよ」

「その通りよ！」

魔王が戦っている横からクリスティーナが天使に斬り掛かる。それを回避して天使は飛翔する。

「出来ればクリスティーナ様とは剣を交えたくはないのですが」

「ふん。そう思うならさっさとやられなさい」

クリスティーナは左手を天使に向けて掲げる。掌から月と太陽を示すシフィアの魔法陣が浮かび上がる。そこから光の矢を無数に出現させ、天使に放つ。

「小賢しいことを！」

天使はその攻撃を回避し、避けきれない矢を剣で叩き落す。それを追いかけるようにクリスティーナは魔術で空を駆ける。

その姿を見た天使は初めて表情を崩す。

「空を飛べるのはあんただけじゃないのよ！」  
「くっ」

クリスティーナに重い一撃を貰って空中でよろめく。クリスティーナの手は休まない。体勢を整えようとする天使に容赦なく攻撃を加える。落下中にも拘らずうまくそれを受け止めた天使は、流石空で戦い慣れているといったところだ。

天使はクリスティーナに言う。

「何故あの者を助けるのです。先程のやり取りを見て疑問を感じなかったのですか!?!」

「気になることはあった。でも悩んでも仕方ない。それに、それがあんたにクルスを斬らせる理由にはならない」

「その疑問が今後のあなたの人生を左右する問題だとしてもですか?」

「だとしたら尚更あんたは関係ないでしょうが!」

空中に見えない地面があるようにクリスティーナと天使は斬り合う。

剣撃が速過ぎてお互いの剣がぶつかった時の火花しか見えない。高速の斬り合いでも天使の方が押されているのが魔王でも解った。人間が、天使を。それも力天使を圧倒している。魔王を倒した時もそうだったが、クリスティーナの潜在能力は最早人間を超えている。

「気になることがあったら聞けばいい! 話す気がないなら無理にでも聞き出せばいい!」

クリスティーナの剣に天使がついにバランスを崩す。そこへ間を

空けず踏み込む。

「私はあなたのためを思って」  
「関係ない！ わたしたちの問題に後からしゃしゃり出たあんたにつべこべ言われる筋合いはない！」

天使が地面に叩き落される。勢いよく吹き飛ばされた天使は魔王に向かって落下してくる。

「クルス、止めよろしく」  
「おう！」

魔王は落下物を一閃する。しかし天使は空中で回転してそれを受け流し、魔王の背後に回る。

「何て身のこなし」  
「言っても駄目なのだとしたら、見てもらう他ありません」

天使の剣が魔王を 魔王の影を刺す。刺した剣は地面でなく影だけを正確に貫いている。それが魔王には解る。その事実には魔王は驚愕を隠せない。

「まさか!？」  
「その、まさかです」

剣が発光する。発光した部分から影が引き剥がされる。その影が人の姿で突然出現する。

「きゃっ」  
「セシリー!？」

紅いドレス風の女性がよるめきながら魔王に近づく。いきなりのこととでセシリーは動揺するもすぐに天使に向けて構える。

しかし魔王には天使のことなど気にならなかった。魔王は真つ直ぐに地面に降りてきたクリスティーナを見る。

「なん、で……魔王の使い魔がクルスから……」

震える声でクリスティーナは状況を理解しようとする。

クリスティーナは大戦時にセシリーを目撃している。魔王の使い魔であることも知っている。そして、使い魔は主に絶対的な忠義を持っていることも、常に傍にいる存在であるということも知っている。

「どづいつことなのよ！ 説明してよ！」

夜の山にクリスティーナの絶叫に近い声が木霊した。

## 第5話：天使（2）

魔王とクリスティーナが対峙する。

クリスティーナはこれまででない形相で魔王を睨んでいる。こんな表情は大戦時の決戦でも見せなかった。それ程にショックが大きかったということだろう。

「（……………魔王様）」

「（お前は天使のことだけ気にしている）」

「（……………畏まりました）」

セシリーにそう指示を出すと、魔王はクリスティーナに近づいていく。

この状況で天使を無視することは出来ない。魔王自身が弱体化している今、セシリーだけに任せるにはあまりにも危険だ。だがそれ以上に無視できない問題が目の前に存在する。

「それ以上近づかないで」

歩み寄ろうとした魔王にクリスティーナの冷たい声が掛かる。

お互いの距離は約五メートル。クリスティーナの実力なら一瞬で詰め寄れる長さだ。

クリスティーナは剣を地面に突き立てる。それでも剣の柄から手を離すつもりはないらしい。

「説明して」

「……………」

魔王は回答に困った。

セシリーが魔王の影から現れた時点でクリステイナに正体がバレたと判断している。クリステイナは屈強な剣士にして優秀な魔術師。使い魔とその主の関係を知らない筈がない。

使い魔とは、魔術師が使役する絶対的な従者のことだ。そのスタイルは、主の守護や共に戦ったりと、魔術師と契約する使い魔によって大きく異なる。

中でも全てに共通するのが、使い魔は常に主の身を守る立場にあることだ。姿形は問わず、主の危機に即座に対応できるようにすぐ傍で控えているのが使い魔の在り方である。

そして今回の場合、セシリーは影で控えていた。魔王には仲間が多くいたが、使い魔はセシリーのみ。

その意味は一つしかない。

「どうしてクルスから魔王の使い魔が出てきたのかって聞いているのよ!？」

魔王を焦らせるようにクリステイナは叫ぶ。

クリステイナが魔術と無縁だったらどんなに楽だっただろうか、と魔王は思う。

怪我をしていたから放っておけなかった。悪いのは魔王であって、彼女ではない。

そんな偽善染みた言い訳が頭の中に出てくる。しかし魔術の心得があるクリステイナに効果はない。

関係ないか。

魔族が人間を嫌うように、人間は魔族を畏怖<sup>いぶ</sup>する。それがこの世界の現実だ。人間が魔族と一緒に行動しているだけで異常なのだ。それこそ魔術師と使い魔のような主従関係でもない限り。

何を言っても意味はない。

だから、魔王は決断する。

「私が魔王だからだ」  
「……………っ！」

クリスティーナは予想道理の回答を得られた筈だが、驚きは隠せないようだ。

「どうして……………わたしの封印は不完全だったってこと……………?」

「お前の封印は完璧だった。ただ先日の戦争で封印が一瞬だけ緩んだ。その隙を突いた私の優秀な使い魔によって助けられた」

「じゃあ！ 何でクルスの姿をしているの!? わたしに近づく理由は分かるけど、あまりにも出来すぎじゃない！」

当然の疑問だが、魔王に答えられるのは一言しかない。

「それに関しては偶然としか言いようがない」

「偶然でわたしの恋人の姿に何てなれるわけ」

「残念ながら私に変身能力はない」

「だったら何で！」

「人間クルスは既に死亡している」

魔王はクリスティーナにとって残酷な事実を突きつける。国を追われ、味方を失い、クリスティーナの唯一の拠り所だった恋人が、既に故人である現実を魔王は包み隠さず告げる。

「私が封印から逃れた時にはリブラークの兵に殺されていた」  
「……………い……………」

「魂だけとなった私は一番近くにあった死体を拝借してその身体を貰った」

「や、だ……………」

「そして我が使い魔の魔力で死体を修繕して現在に至る。奪った身体の主がお前の恋人だったのは本当に偶然なのだ」

魔王が身体を奪った人間について話し終える。

だが、クリスティーナの耳にはあまり入っていないようだ。

「嫌だ。クルス．．．わたしを独りにしないでよ」

「．．．．．」

「嫌だ．．．．．嫌だよ．．．．．」

クリスティーナは柄から手を離す。そのまま倒れるように地面に崩れ落ちる。涙で顔を濡らしながらクリスティーナは魔王を見る。自分の恋人の姿をした魔王を縋るように視る。

そこにいるのは、元シフィアの王でも、魔王を倒した姫でもなかった。力なく地面に座り込んだクリスティーナは、どこにでもいる少女だった。大切な人を失った現実を知り、悲しみで打ち拉ぐ。普通の人間．．．．．。

そんなクリスティーナの姿を見て魔王は思う。

私もあいつを失った時にあんな顔をしていたのだろうか。

本当なら仇であるクリスティーナが苦しむ姿を魔王は喜ぶ筈だった。どうだ、我々はそれ以上の苦痛を味わったのだ　と罵り嗤うつもりだった。

しかし魔王にはそれが出来なかった。

現在のクリスティーナを見ても、そんなことをしようなどと思う気にすらなれない。寧ろ、手を差し伸べたくなる衝動に駆られる。だがそれは魔王には許されない。クリスティーナの恋人を殺したのがリブラーク兵であっても、あの戦争を引き起こした原因は魔王なのだ。慰めの言葉を掛けられる立場ではない。

長く一緒にいすぎたか。

今の魔王には驚く程憎悪がない。封印前後は憎くて仕方がなかつ

た。けれど今は、ただひたすらに目の前の少女が憐れにしか見え  
ない。

この気持ちは数日の旅で情が移ったのか、人間クルスの感情が入  
り混じっているのか、魔王には判らない。

「赦さない」

クリスティーナは言った。

「赦さなあああああああい！」

クリスティーナの叫びに周囲の空気が揺れた。立ち上がり、剣を  
握る。目に見える形まで全身から魔力を放出させ、それだけで威圧  
せんとばかりの眼光を魔王に向ける。

嗚呼、同じだ。

魔王はクリスティーナを見て確信した。

目の前のあれはあの日の私だ。

大切な人を失った悲しみを、怒りを、ぶつける場所を求めて吼え  
る。

そして、その目標は魔王へと向けられた。

「返してよ。わたしのクルスを返してよ」

「人間クルスは死んだ。死んだ者は誰であつても返つて来ない。人  
間も……魔族も。そこに例外はない」

「あるじゃない。目の前に」

「先程も言った通り、私は人間クルスの死体を拝借したに過ぎない。  
私の魂を引き剥がしたところで朽ちる現実が待っているだけだ」

「関係ない……関係ない！返して返せええええええ  
え！」

クリステイナーが魔王の間合いに飛び込んでくる。咄嗟に剣で受け止める。天使の時とは比べられない衝撃が武器から腕に伝わり。思わず剣を取り落としそうになる。

剣の動きが見えなかった!?

反射的に防御行動を取らなければ、今頃魔王の胴体は二つに分かれていたかもしれない。正に神速。生身の人間の目では追い着くことが出来ない。鋭い戦慄が全身を駆け抜けた。

「(天使の方はどうなっている?)」

「(どうやら静観するようです。しかしわたくしを魔王様の下へ行かせる気もないようです)」

「(わかった。こちらは何とかする。絶対に天使を逃がすな)」

「(畏まりました。ですが、具体的にどうなさるのです?)」

「(具体的なプランなどない。ただ分らず屋の目を覚まさせるだけだ)」

魔王は受け止めた片方の剣を下段から上段へ振り上げる。クリステイナーは後方に跳んで避ける。魔王はそれを追いかける。着地を狙って剣を振りかざす。攻撃を即座に読んだクリステイナーは魔術で振りかざした剣を弾く。あっさりと剣は魔王から離れ、地面を転がる。

しかし魔王は追撃を止めない。もう一方の剣でクリステイナーの間合いに近づく。クリステイナーは再び魔術を放つ。だが魔王はそれを上回る速さで回避する。

「.....っ!」

その動きを見たクリステイナーの顔に驚愕が浮かび上がる。

魔王はクリステイナーの剣や魔術に対応できない。単純にそれだけの実力の差があるからだ。けれど、今はそれが出来る。

どんな猛者も冷静さを失えば弱者と化す。……………大戦時の私が良い例だ。

自嘲するように分析しながら剣を構える。クリスティーナの攻撃は速い。目で見てからでは手遅れになる。だが、冷静さを失った今のクリスティーナは速くても動きが単調。ようは簡単に攻撃が読める。

攻撃のタイミングが解ればどんなに速くても対策が打てる。殺害まで至らなくても、一撃を加えることなら出来る。

今なら！

魔王は剣を一閃する。防御が遅れたクリスティーナに最高の一撃を与える。

「があっ！」

直後、頭に強い衝撃が走る。頭蓋骨を直接ハンマーで殴られたような痛みが魔王の脳を揺さぶる。

「なん、だ……………？」

辛うじて剣を離さずに立ち尽くすと、変わらずクリスティーナがそこにいた。全身から魔力を放出させたまま魔王と対峙する。

放出された魔力？

そこで合点がいった。

「放出した魔力で防いだのか」

「加えて攻撃もね」

苦しげに言った魔王にクリスティーナはニヤツと口元を吊り上げる。

魔力は魔術を行使するために必要な原料だ。当然、垂れ流された

魔力が使えない道理はない。

攻守の働いた魔力によつて魔王の腕は殆んど使い物にならなくなつていた。直接ダメージを受けた剣から、腕、脳と伝つて魔王は戦闘するのに致命的な損傷を追つた。

手は剣を握るので精一杯で、腕は上がらない。間接的に受けた脳でさえあれだけの衝撃なのだから、まだ立てるだけ運が良かった方だ。

「頭に血が昇るとろくなことがないわ。でも、お陰で目が覚めた」

クリスティーナの頭から一筋の血が流れる。やっと届いた一撃。そして、それが魔王にとつての限界だった。

クリスティーナは血を拭う手の甲で拭うと、同時に垂れ流された魔力が消えていく。

まずい。

「（セシリー！ 今すぐ私の影に戻つて来い！）」

「（で、でも天使が！）」

「（一瞬で良い。一瞬だけ魔術的補助が出来れば……………！）」

「（畏まりました）」

魔王の影にセシリーが入る。同時に背中から天使が近づくと感覚がする。正面には魔力を通常に制御したクリスティーナがいる。

勝負は一瞬。背水の陣で挑まなければならない。

魔王は飛び出し、クリスティーナに向かって武器も構えずに突っ込む。

「え！？」

突然の魔王の有り得ない行動にクリスティーナは反応が遅れる。

その隙を魔王は逃さない。

魔王の眼前で闇色の六芒星が輝く。それを見たクリスティーナは再び驚きを隠せなくなる。

「垂れ流されて放棄された魔力が使えるのは、何も放出した本人だけでない」

魔王の企みは単純だった。空中に漂っているクリスティーナの回収しきれなかった魔力を利用し、状況を覆す。人間クルスでは魔術を使えない。だから、影でセシリーに魔術補助をもらう必要があった。

久しぶりの魔術的感覚に魔王は顔に出さないように歓喜する。少量で全力の魔力を込める。

闇色の魔法陣の輝きが増し、破裂するように弾けた。

魔王とクリスティーナの間に爆発が生まれる。視界が灰色に染まる。爆風で転びそうになるが、耐えて魔王は更に前へ踏み込む。

魔王の計画は杜撰だ。ずさんそれを魔王自身が一番自覚していた。

視界を奪ったところでクリスティーナをうまく見つけられるとは限らないし、逆に利用される可能性がある。煙を魔王ごと吹き飛ばす魔術が使われればそれこ意味がない。こんなくだらない戦法の対策などいくらでも打ちようがある。それでも魔王はやらないわけにはいかなかった。ただ黙ってやられることなど、魔王には出来なかった。

届け……！！

魔王はうまく動かない腕で無理矢理剣を振り上げる。渾身の一撃を加えるために魔王はクリスティーナへ駆ける。

しかし魔王の動きが止まる。何者かに左右から腕ごと身体を捕まれる。

「何だ!？」

「何よこれ……!？」

視界が見えない中でクリスティーナの声が響く。どうやら魔王と同じような目に合っているらしい。

莫大な気配が魔王の周囲に集まる。

そして、突然の強風によって視界が晴れる。

「……馬鹿な」

魔王は目の前の光景に絶句する。

天使がいた。

魔王の左右に二体。クリスティーナには四体。それぞれ緑色の鎧を纏った天使が拘束している。他にも視界に入らない者も含めて複数の天使が魔王とクリスティーナを囲っていた。

「今度は第七位のプリンシパリティ権天使か」

最初に来た力天使と比べれば大したことはないが、数で攻められれば手の打ちようがない。その証拠に、力天使を圧倒していたクリスティーナも羽交い絞めされて動きを封じられている。

最初に現れた力天使が魔王の前に降りる。

「流石は魔王。一目見ただけで解りますか」

「……どういっつもりだ？ 私とクリスティーナを争わせるようなマネをして 目的は何だ？」

「お二人を戦わせるつもりはありませんでした」

今更どの口が言うのか、と魔王は内心で吐き捨てた。

そんな魔王の心境も解らず、力天使は衝撃の事実を告げる。

「私は主の命令で、貴方たちと主の仲介を頼まれただけですよ。 . . .  
. . . 会っていただけますね？ 我が主に」

## 第6話：神

天使の言葉に魔王は困惑する。

天使とは神の僕。即ち、天使の主とは神に他ならない。

神がここに来る？ 私の目の前に？

『ディオ・リナ』を管理する三柱の神。

これは魔王だけでなく、『ディオ・リナ』に住む全ての生物が例外なく知っていることだ。だが、強いて言うならば、それだけしか知らない。

神の存在は最早常識となっている。それなのに詳しいことは意外に伝わっていないのだ。神はいつから『ディオ・リナ』を管理しているのか、一体人々に何を求めているのか、何故存在しているのか疑問に思うことは多くあれど、事實は不明。それでも神の存在は認知され、それらの信仰も沢山ある。

魔王でさえ、神は強大な力を持った存在としか知らない。天使を従えている時点でそこは考えるまでもないだろう。そして

「神は傍観者だ」

「傍観者………？」

魔王と向かい側に拘束されたクリステイーナは首を傾げる。

魔王を見下ろす力天使を強く睨む。それでも天使は無表情を貫く。

「傍観者がどうしてこんなところに来る？ そんなことは」

「そりゃあ、傍観するからに決まってるじゃん」

魔王の言葉は割って入った声に遮られる。

聞き覚えのない声。声の発生源を探して首を動かすと、いつからそこにいたのかこれまた見覚えのない少女が力天使近くの木の枝に

腰掛けていた。

場違いな少女だ。

歳は精々十四、五ほど。身体の膨らみが全体的に乏しいのにも拘らず、踊り子が纏うような露出が無駄に多い格好をしている。そのせいか、子供が無理に大人ぶっているようにしか見えない。

腰まで伸びた所々癖のある金髪から、整った顔立ちが覗いている。それは面白いものを見つけた子供のような笑顔だった。

「楽しいことが起こるって分かってたら近くまで見に行くのが普通っしょ」

「誰だ？」

「ご指名の神ですが？」

目の前の少女の一言に魔王の思考が一時停止する。

「……………お前が？」

「その通り！」

少女は肯定を示して勢いよく木から飛び降りる。そして、魔王を指し、何やらポーズを決める。

「『ウィルフレド・イマ』を統べる神が一柱、エストレイアとは私あてのことだー！」

「……………」

「気軽にエストって呼んでくれていいよ」

「……………」

「あれ。反応が薄い？もしかして魔王くん声届いてない？意外に耳が遠いお年頃だったとか？」

「お前のどこが神だ」

魔王には突然現れた少女が神などと思えなかった。

現在魔力ゼロの人間の身体を使っている魔王だが、全く察知できないわけではない。以前よりかなり鈍くなったことは否めないが、目の前にいる者の魔力が読めない程落ちぶれていない。セシリーによつて影で魔力補助されている今なら尚更だ。

エストレイアの魔力はゼロに等しい。現在の魔王と良い勝負だ。天使たちでも隠すことが出来ない魔力を、それ以上の莫大な力を持つ神が偽れるわけがない。

魔王の呟きに自称神のエストレイアは、うーん、とわざとらしく唸る。

「んなこと言われてもなー。それっばい格好して『跪け愚民共！おほほほほほほ！』って見下すように言えば信じてもらえる？」

「どこの女王だそれは」

「………何でわたしの方見て言うのよ」

「仲良いなー二人は」

「話を戻せ！」

妙な話の流れになつてきたので魔王は修正を試みる。それでも態度を改めようとしなないエストレイアに若干憤る。

「お前から魔力を感じられない。天使でさえ感じる魔力を神であるお前から感じられないのはおかしいだろう」

「ぶーぶー！ 偏見反対！」

「真面目に答える！」

「真面目にって言われてもねー。巧妙に察知されないように隠してあるからに決まってるじゃん？ だってほら、でなきゃあてが現れる度に有名人よろしくとばかりに囲まれちゃうぜ」

「そんな筈がないだろう」

「随分と自信があるようだけど、やっぱりそれは偏見だよ」

おどけた調子から一変して、エストレイアは窘めるように言う。

「魔王くんが本調子ならきつと一発で見破れたかもしれないけどさ・  
・・・神つてのは強大な力を持つてるからといって、強大な魔  
力を持つてるとは限らないんだよ」

「何だと？」

「これが『ディオ・リナ』と『ウィルフレド・イマ』の力の価値観  
の違いだろうね。思い出して。魔王くんは神がどんな存在だと思っ  
てた？」

「傍観者・・・」

「そう、傍観者。傍観者が態々管理している世界の住人よりも強く  
なる必要はないよね？」

まさに青天の霹靂。

衝撃の事実、魔王は驚きを隠せない。

「し、しかしそれではおかしいではないか！」

「おかしくないよ。神が強大な存在って考え自体がそもそも偏見な  
んだよ。神なんて所詮役職みたいなもんだからね。だから崇められ  
ても人々を導かない。神の仕事は『ディオ・リナ』という世界の管  
理であつて、その中の住人は含まれていない。ただ、見守るだけ。

そう 傍観するだけだよ」

「天使は？ 強大な存在だから従っているのではないのか？」

「王様や貴族みたいな偉い人が護衛を雇ってるは自分の身を守るた  
めだよ。今のあてもそれと同じ」

「そんな・・・」

「まあ、神と天使の関係はもつと複雑なんだけど説明はだるいから  
却下」

これでこの話は終わり、とエストレイアは態度を戻す。  
魔王は分からなくなった。

神とは絶対的な存在。だから象徴的な存在であっても、何も出来ない時に誰もが一番に頼る。魔王とて幼少の頃は、目の前にいない神に縋った黒歴史がある。人間なら特に絶望的なことがあれが誰もが縋るだろう。神様助けて、と。

神とは傍観者。それは魔王の中で確立した定義だ。『ディオ・リナ』を管理する存在が戦争で人や魔族がどれだけ死んでも助けようとしな。国でいう王のような立場のくせに、常に見ているだけという体たらく。解っていたはずなのに、実際に会ってみると改めて落胆せざるおえない。

そんな魔王の様子にエストレイアはニタニタと不快な笑みを浮かべる。

「納得できないって顔だね」

「……………」

「信じるのは魔王くん次第さ。神は所詮、人が最後の最後に縋るに値しない存在だってね。神も一個の生物。人や魔族と一緒にさ」

魔王の心を見透かすような発言に押し黙る。

エストレイアの言っていることに嘘はない。直感でしかないが、魔王はそう信じる。

だが、それならば何故神は人々に崇められる存在となったのか。どうでもいい筈なのに、魔王にはそれを無視してはいけない気がしてならない。

こちらの思考を打ち切るようにエストレイアが手を叩く。

「神に関する質問はこれ以上却下ね。第一、こんな堅苦かたつくろしい話をしに来たんじゃないし」

「……………」では、一体何のために私たちの前に現れた」

「君たちと立場とか抜きで仲良くなりたくてねー」

冗談としか思えない答えに魔王は苦笑する。

「どの口がほざく。これだけ掻き乱しておいて仲良くも何もないだろっ」

「ホントにねー。シャイなあてのために仲介を頼んだのにぐっただぐだじゃん」

そういつて傍らに浮く力天使を見上げるエストレイア。

力天使はエストレイアの横に降りる。その表情は相変わらず無表情だ。

「申し訳ありません。お戯たわむれが過ぎました」

「ホントにねー。クリスちゃんに魔王くんの正体バラすとか超クライマックスじゃん。……しかも正体隠して一週間と経たないとかシヨボすぎでしょ」

「全くですね」

「ねー」

「ふざけるにも程々にしろ」

魔王は殺意を向けた目でエストレイアを睨む。自分の身体を取り戻すために手に入れた僅かな可能性を、こんな奴らに潰されたのかと思うと、魔王は悔しくて仕方がない。

魔王の睨みも意味なく、エストレイアは口を押さえて笑う。

「そんな両手に花持つてる状態で言われてもねー」

魔王を左右から押さえているのは女性の天使だ。

表情を変えない力天使と違い、権天使たちはエストレイアのセリ

フに恥らう様子を見せる。しかし拘束を緩めるようなミスはしない。

「迫力に欠けます。寧ろ、ふざけているのはそちらでは、と問いたくなるくらいです」

「わかるわかる！ それあても思った」

「もういい！」

魔王は目の前の二人のやり取りにうんざりする。

「お前たちは本当に何が目的で現れたんだ？」

「二人と友達になりたくて会いに来た」

「その二人を殺し合いまで追い込んでおいてか？」

「それはそれ。だからあてはまず二人の仲から戻してしんぜよう！」

エストレイアは高らかに宣言した。

クリステイーナは何とも言えない気持ちで薄暗い山道を歩いていた。

同行者は神のエストレイアと魔王の使い魔セシリーの二人？だ。

その周囲は緑色の鎧を纏った天使が一定の距離を保って固めている。逃げることは不可能だ。

そもそも、どうしてこうなったのかクリステイーナにはいまいち分からない。気づいたらこうなった、といった状況だ。

エストレイアの提案はこうだ。

「お風呂に入りましょう」

「はあ？」

「だから、裸の付き合い！ これが仲直りの一番の道！」

そう言われ、平地から離れて山を下っている今に至る。

仲直り、と言われてクリスティナは複雑な気分になる。クリスティナと魔王の問題はそれだけで済む話ではない。魔王の方も言い分はあるだろうが、きつとお互いに譲れない。お互いに赦せないことをしたのだ。

やがて広く切り開かれた場所に出た。以前に見た池のような所だ。違いがあるとすれば、水が光っていることと水面から湯気が出ていることだ。

近くまで寄って手で掬すくい上げる。

「これは？」

「温泉だよ」

「天然もの？」

「そうだよ。あ、光ってるのは暗いと入りづらいから魔術で明るくしてるってだけね」

エストレイアの言葉に疑問を感じる。

温泉の周りは不自然に整えてあり、端の方には掘削した形跡が見られる。天然では有り得ない状態だった。

クリスティナの様子を察したのかエストレイアは付け足すように言う。

「天然ものつてのは間違いないけど、それをルーニス王国が偶然見つけて観光用に温泉を広げようとしたんだよね」

「ああ……それで」

「でも工事の途中でそれは無理だつて分かって計画はオジャン。だから中途半端に弄つたまま放置つてわけ」

「どうして無理なの？ 今もこうして沸いてるじゃない」

「正確には沸いてないよ。ただ溜まってるだけ。火山活動とかで偶

然流れた水脈がここに溜まったんだろうね。んでもって、吸い上げればいつか限界がくるのが分かったから放棄したのさ」

成程ね、とクリステイーナは納得する。

最初に訪れた平地は明らかに人の手が加えられた跡があった。どうやらそれはルーニス王国による工事跡らしい。中途半端な開拓と、放置されていた理由に合点がいく。

「それでもまだ温かいままなのね」

不思議と掬った温泉は熱くも冷たくもない、心地良い温かさを保っていた。

「うん。自然の力って偉大だよな」

エストレイアも感心するような目で温泉を見る。

そして、前触れもなく服を脱ぎ出した。いきなりの行動に流石のクリステイーナも戸惑う。

「な、何してるの？」

「何って。温泉入るなら服は脱ぐでしょ？」

「それはそうだけど……」

この子には羞恥はないのかしら。

以前の宿の出来事を棚に上げてクリステイーナは思う。同性とはいえ、誰かと一緒に風呂に入る習慣のないクリステイーナには裸を見せるのに抵抗があった。

こつちのことはお構い無しにエストレイアは温泉の奥へと入っていく。

「早く入りなよ。良い湯加減だよ」

「そうは言っても……」

「大丈夫だよ。周りにいる天使は全員女だから恥ずかしがることなんてないよ」

このままどこかに逃げてしまいたい そんな衝動に駆られる。

しかし天使の包囲網を突破することは無理だ。クリスティーナは取り上げられた剣の代わりに渡されたタオルを頼りなく掴む。そしてもう一人、さっきから黙っている同行者に助けを求め。

「ねえ、あんたからも何か言いなさいよ」

「わたくしは魔王様と一緒にならどこへでも行く覚悟です」

やや拗ねた声でセシリーは言う。

仲直りの名目で連れて来られたのに肝心の魔王はここにはいない。エストレイアの命令で、魔王は力天使によって湯浴みを覗かれないように隔離されているとのこと。それがこの使い魔は不満らしい。クリスティーナとしても話し合うのに隔離するのはおかしいと感じずにはいらなかった。

そんな二人にエストレイアは容姿に不釣り合いな妖艶ようえんな笑みを浮かべる。

「知りたいでしょう？ 魔王のこと」

エストレイアは歌うように口ずさむ。

「知って欲しいでしょう？ 自分の主のこと」

戸惑う二人に手が差し伸ばされる。

そして、神は誘いざなう。

「教えてあげるよ。お互いが知りたくて堪らない大戦あひのことを」

## 第7話：魔王国

魔王はでかい廊下を闊歩かっぽしていた。

でかい、とは仰々しい言い方かもしれないが、魔王城ではこれが当たり前だった。

何せ、地面から天井まで約六メートルあり、壁と壁の間は五メートル程の幅で作られている。その理由は魔王の身体の大きさにある。魔王は普通の魔族よりも三倍近くある巨体ため、城の中全てにおいて大きめに作らなければ生活も儘ままならない。

それでも魔王にとっては窮屈な場所に変わりない。だからといって、魔王の全ての要望を叶えてしまうと、魔王城だけでとんでもない大きさと広さを必要としてしまう。領土に限りがある以上、贅沢はできない。

目的地に着くと魔王は屈んだ姿勢で扉を開けた。面倒だと感じながら魔王は部屋へ入ろうとする。

何故屈む必要があるのかというと、自室と出入口を除いた扉は全て広大な廊下に合わせて設計されていないからだ。これもまた魔王に合わせてしまえば、扉の開け閉めだけで一苦労することになる。そのため、魔王が屈んでやっと入れる大きさを統一されたのだ。魔王に不満は勿論あるが、城を利用する全ての者のことを考えれば、そんな我が儘はできなかった。

入室してから最初に魔王の目に映ったのは、上半身を開けたはだ女性の背中だ。その背中が扉の音の気づいてこちらに振り返る。開けた上半身ごと。今の自分の状況を忘れているのか、魔王を見ても自然と話しかけてくる。

「あら、速かったのね。 . . . . . どうしたの？」  
「いや、まあ . . . . . 」

おそらく顔を真っ赤にしているであろう魔王に女性は首を傾げる。女性の向かい側にいる老婆がニタニタしながら、からかうように「まあまあ」と呟いている。

腰の中段まで届くさざりとした薄い青色の髪に、丸みを帯びつつもほっそりとした小顔。腰は括れ、四肢はすらりと伸びている。外見こそ二十歳前後の若者に見えるが、実年齢は向かい側の老婆より何倍も上だ。

そして、この少女のような容姿の女性が魔王王国建国の立役者だ。立場上、魔王が魔王国を建国したと謳っているが、その経緯はこの女性から始まった。何も無かった魔王にきっかけを作り、今日という日まで傍で支え、導いてくれた女性。

故に、この上半身裸の女性は魔王にとってとても大切な存在だ。魔王は女性の名を呼ぶ。

「……………フェルミア」

「何？」

年齢に合わない幼さを感じさせるつぶらな瞳を向けられ、魔王は言い淀む。だが、頭を掻きながら決意する。

「服が脱げているぞ」

「……………?」

フェルミアは視線を真下に向けると、自分の現在の状況は把握する。すると、見る見る内に顔が羞恥で真っ赤になり、慌てて両腕で胸を隠す。そして、羞恥から怒りへと顔を染めていく。

「き、気づいてたならさっさといええええええええええええっ!」  
「ぐぐっおっ」

叫びながら魔王の顔面にきつい蹴りを入れられる。魔王は中途半端な入室のせいで後頭部を扉の角にぶつけた。ぶつけたところを押さえながら魔王は蹲る。

その隙にフェルミアは服装を整えると顔を赤くしたまま魔王を睨みつける。

「ありえないありえない！ 人が着替えてるところに部屋に入ってくるとか信じられない！」

「……知らなかったのだ」

「ノックくらいしなさいよ！ 常識でしょ、常識！」

「貴方様も普通に対応していただけではありませんか」

フェルミアの罵詈雑言から助け船を出したのは一緒にいた老婆だ。何やら呆れた様子で老婆は魔王とフェルミアを見ている。

「それに、今更裸を見られたところで恥ずかしがるような関係でもありませんまい」

「それとこれは別よ」

「まだまだ初心つひということでしょうか」

「もう。からかわないでよ」

「ほっほっほ」

陽気に笑う老婆に対してフェルミアは照れた表情で壁に立て掛けてあった剣を担ぐ。それを見た老婆は慌てて剣をフェルミアから引く手繰る。しかし重さに耐えられずに剣を床に落としてしまう。

「ちよ、何するのよ」

「いけません、フェルミア様。こんな重たいものを背負って生活してはお身体に障ります」

「これくらい平気よ。いつも持ち歩いてるんだし」

「医師として許可できません。魔王様からも何か仰ってください」

話に付いていけず、魔王は回答に困る。

魔王が訪れたのは医務室だ。そして、目の前の老婆は魔王国屈指の医師である。フェルミアに呼ばれてすぐに来たのだが、まさか診察中だとは思いつかなかったのだ。

診察？

魔王に嫌な予感が過ぎる。

「フェルミアの身体に何かあったのか？」

「それはですね」

「重い病気か？ それとも怪我でもしたのか!？」

魔王は焦燥ウツクシに駆られる。

診察室に呼ばれたこと。診察を受けているフェルミア。

この二つからフェルミアが何らかの治療を必要とする状態であることは明白だ。しかも、態々魔王を呼び出すくらいだからただの怪我や病気などではない。

「お、落ち着いてください魔王様！」

「これが落ち着いていられるか！ 何かあった!？」

「逆ですよ。逆！ 病気などではありません」

「逆だと……?？」

言っている意味が解らず魔王は困惑した顔でフェルミアを見る。

フェルミアは、はにかんで頬を赤らめ、お腹を擦る。その動作の意味を流石の魔王も知らない筈はなかった。

「まさか……」

「はい、魔王様。おめでとつございます」

魔王はフェルミアの傍に寄り、お腹に　手が大きすぎるため  
指を当てる。魔王の大きい指を抱き締めるように上からフェルミ  
アは腕を置く。

「ここに、いるのか？」

「うん。あたしたちの最初の子供……出来ちゃった」

形ある幸せの誕生を魔王とフェルミアは心から喜んだ。

魔王と王妃であるフェルミアの間に子供が出来た。

その朗報は瞬く間に国中に伝わった。

それから祝福の言葉を綴った手紙や妊婦向けの食料など、魔王城  
に多くの贈り物が送られてきた。一度街へ行った時は大勢の魔族に  
囲まれ、魔王とフェルミアが子を授かったことを、まるで自分たち  
のこのように喜んでくれた。そんな民たちの様子に魔王とフェル  
ミアは照れながらも心から嬉しく思う。

そして、フェルミアが魔王の子を宿したことが分かった日から三  
ヶ月経った現在。

「今日もこれだけの贈り物が届きました」

セシリーが魔王とフェルミアの部屋に抱えなければ運べない程の  
荷物を持ってきた。部屋の中は既に多くの進物で埋まり、置く場所  
もなくなってきた。最初の頃と比べれば減った方だが、毎日の  
ようにこうして何らかの物が贈られてくる。それだけで魔王とフェ  
ルミアが国中から慕われているのが判る。

「ありがとう。でもこんなに沢山一人で運ばなくても……」  
「言ってくれば手伝ったのに」

「産休中のフェルミア様の手を煩わせるわけにはいきませんから。それに、これはわたくし自身が好きでやっていることですので」

「産休は大袈裟よ。まだ全然お腹大きくなってないんだからそれぐらい大したことないわよ」

フェルミアのお腹は本人が言う通り産休する程大きくはない。しかし服越しに見ただけでは気づかないが、触ってみると少しだが膨らんでいるのが判る。まだその程度なのだが、セシリーは相変わらず心配性のようだ。寧ろお腹の子に対して過保護と言った方がいいかもしれない。

セシリーは空いているスペースに荷物を丁寧に置く。

「それでもお身体に気を使わなければならないのは事実です。何かがあつてからでは遅いのです」

「はいはい。わかりました。………つたく、セシリーは相変わらず石頭ね」

「わかつていただけたのならわたしは満足です」

フェルミアの冗談を軽く受け流したセシリーは魔王へと向き直る。

「魔王様。こちらの準備も整いましたのでいつでも出発できます」

「わかった。すぐ行く」

セシリーは一礼して部屋を退室する。

それを見送ったフェルミアは魔王を見上げる。

「今回はどこへ向かうの？」

「北のセリアンスロープの集落を訪れようと思っている」

魔王は魔王国建国に至り、多くの魔族を勧誘した。いくら国を築いても、そこに暮らす者がいなくては意味がないからだ。そして、それは建国後の現在でも続いている。誘う相手にも本気になってもらうため、王である魔王が直接交渉に向かう。

「今回はいつもより長く国を空ける。留守を頼む」

「任せておいて」

「本当なら少しでも多くの時間一緒にいたいのだが……」

「もう。あなたもセシリーみたいなことって……どうせ産まれたら産まれたで子供から離れたくないって言い出すんだから今の内にやれることやっておきなさいよ」

「あっははははは！ 違うない！」

凶星を指され、魔王は豪快に笑う。

セリアンスロープの集落は魔王国とは距離があるため、交渉する期間を考えれば往復で最低三週間は掛かる。それだけの期間でも離れるのが惜しいのだ。実際に子供が産まれれば、きつと今以上に気持ちを抑えられないだろう。

フェルミアを優しく抱き締める。それは魔王が国を出る度の習慣だった。

名残惜しみながら離すと、はにかむフェルミアの顔が魔王を見つめる。

「では、行って来る」

「行ってらっしゃい、あなた」

魔王は平和に近づくため、国を出た。

魔王が国を出てから二週間程経った頃。

フェルミアは夜中に目を覚ました。

嫌な汗が流れ、体が重い。妊娠している内は珍しくない症状だが、やはり慣れることはない。汗を冷たいタオルで拭き、背中を擦って欲しいと思った。こういう時のために常に隣の部屋に誰かを待機させている。しかしたつたそれだけのために起こすのは申し訳なく、とても呼ぶ気になれなかった。

水でも飲もうとベットから降りる。すると、不意に人の気配が部屋の隅から発せられた。

その方向へ体を向ける。

窓から差す月明かりが侵入者を照らす。影で顔が見えない。性別も不明。ただ、人間とも魔族とも言い難い気配をした人物が一人そこに佇んでいた。

「誰………?」

回答は攻撃によって齧された。

フェルミアは正体不明の攻撃を受けて床を転がる。斬られた傷から血が溢れる。しかしフェルミアは動かない。

そして、フェルミアが背を向けていた壁には太陽と月を合わせた紋章が刻まれていた。

## 第8話：魔王国（2）

魔王はセリアンスロープの集落から引き返し、自国へと向かっている。魔王国から緊急事態であると連絡が入ったからだ。

報告は、人間によって魔王国が攻撃を受けている、といった内容だった。

それ以降の連絡は魔王国から一切届いていない。その意味を魔王は理解して、最速で移動する。

無事でいてくれ。

魔王たちが魔王国を視野に入れる程近づくと、惨状が見て取れた。魔王国を囲む強固な外壁と、壁では隠しきれない魔王城が所々崩れ、今も煙が上がっている。しかし、その原因となった攻撃の音がしない。まだ距離があるとはいえ、あまりにも静か過ぎるのだ。まるで、戦いが既に終わっているような……。

不審に思った魔王は近くにいた魔族を呼ぶ。

「おい、確認に向かえ」

「御意に」

控えていた一人が頷くとすぐに消える。

現在の状況を見ても、魔王の予想では圧倒的に魔王国が不利と言える。国内を把握していない内から判断するのは危険だ。それでも国のトップとして最悪の事態まで考えなければならぬ。

まず、最初に魔王国が人間から攻撃を受けていると報告をした魔族の行方。無事に魔王国に到達していれば、再び魔王に何らかの連絡を寄越す筈だ。しかしそれが無い。そして、魔王国での戦いが終わったかのような現状の様子。終了しているのならそれはそれで問題ないのだが、どちらが勝っているのかで今後の動きが大きく変わってくる。

勝って終わっている場合。魔王国内の状況を確認、すぐに動ける者を集めて怪我人の治療、及び街の修復の準備。同時に次の戦いに備えなければならぬ。

何故なら、今回の攻撃はただ魔王国が襲撃されただけで済む話ではない。これは、人間による魔族への宣戦布告だ。今の時点で既に戦争は始まっている。勝利で終わっていても不利な事実は変わらないだろうが、手を引く術がない以上戦うしかない。

負けて終わっている場合は

「魔王様。ただ今戻りました」

確認に向かわせた魔族が戻ってきた。

「報告を」

「はっ。………現在魔王国は完全に人間に制圧された模様。戦闘は行われていません。魔王国を人間共が我が物顔で出入りしています」

「………っ!」

報告の内容に魔王だけでなく、ここにいる全員が絶句している。魔王国の人口は約五十万人。人間の国の人口と比べれば少ない方だが、数日で制圧される程ではない。

何らかの対軍兵器でも用意しているのか？

情報が少ない今、何を言っても全て憶測でしかない。ここでやるべきことはただ一つ。

「制圧して油断し切っている今しかチャンスはない。剣を取れ。我らが国を取り戻すぞっ!」

応!! と魔王の言葉にこの場にいる全員が迷うことなく応える。

全員で魔王国へと駆ける。意気込みとは裏腹に魔王たちの行動は静かで、尚且つ迅速な動きだった。

何故なら、魔王を含めてこちらの戦力は三十名程度。魔王の護衛として交渉に付いてきた魔族たちだが、本格的な装備は勿論ない。戦うことを前提に集めたメンバーではないのだから当然だ。どちらにしる、魔王国に元々配置していた兵たちと比べれば、大した戦力とは言えない。しかし時間が経てば経つ程、こちらの戦況がより不利になる。不利な状況を更に悪化させないためにも、今ここで立ち上がらなくてはならない。

そういつた作戦の意味を抜きにしても、ここにいる全員の気持ちは一致していた。

人間共め、赦さない！

魔王が攻め込もうと意気だっていた頃。

魔王とフェルミアの部屋。中央の床に布団が敷かれ、そこで血塗れのフェルミアの治療が行われていた。

生死の境を行き来し、現在もその激痛に苛なまれている。傷口や口から血を何度も噴き出しては輸血、包帯の交換を繰り返す。ある程度医療施設が整っている魔王城だが、戦争中のため満足の行く治療が行えない。籠城ろうじょう中の今は薬などの資源も限られている。フェルミアに医師がやれることは延命と気休めしかなかった。

「ねえ……お腹の子は無事、よね……？」

「ええ。フェルミア様が庇かばったお陰で元気でいますよ」

何度交わしたか分からないやり取り。

しかし医師は疲労を見せないように力強く答える。老体の身体には体力的に限界に近かったが、少しでもフェルミアを不安にさせな

いために医師は諦めない。

今のフェルミアを生かしているのは、潜在的な魔力による自己修復能力と医師たちによる治療。そして、自分の子供の存在だ。

だから、医師は嘘を付き続ける。フェルミアのお腹の子が既に亡くなっている事実を隠し通す。それを知ればフェルミアは自分を保てなくなるだろう。今ここでフェルミアの心が折れればそのまま死へと向かう。支えを失えばあつという間にフェルミアは生きることが諦めてしまう。それだけは医師として避けねばならなかった。魔王国内の戦いを終わらせ、安静な場所で手術を行うことが出来ればまだ助かるのだ。まだ助かる命を見捨てることなど出来る筈がない。

「頑張ってください。後もう少しです。．．．．．もう少しで魔王様も帰ってきます。それまでの辛抱です」

「そう．．．．．よ、ね。あたしがいなかったら．．．．．ほんと、何もできないんだから」

虚ろな目で呟くフェルミアに医師の心の方が折れそうになる。流れ落ちそうになる涙を抑え、必死に治療を続ける。

すると、扉が勢いよく開いて一人の兵士が入ってくる。

「た、大変です！」

「無礼者！ 現在のフェルミア様の状況を貴方は知らないのですか！？」

「魔王城の門が破られましたっ！」

医師の返事の代わりに最悪の事実が告げられた。

「そ、そんな．．．．．人間たちは一体どれだけの大軍で攻めて．．．．．」

「いえ。一人です。たった一人に魔王城の門が破られました」

絶望的だ、と医師は思った。ただでさえ不利な状況なのに、大軍でも防衛できる門をたった一人に破壊されるとは。現実かどうか疑いたくなる。

それでも医師のやるべきことは変わらない。

「……わかりました。それで今は徐々に魔王城内が人間に制圧されているのですね？」

「それが……不可解なことに、その一人以外侵入者はいません。現在、門を守っていた兵士で城内へ入らせないように交戦しているところです」

兵士の言う通り、それは不可解なことだ。門を破れる程の実力者なら露払いを任されることはおかしくないが、その後に軍隊が攻め入らないのはありえない。効率が悪い上に、最後の砦を突破したのだから出し惜しみをする必要もない。

とりあえずこの場に留まるのは危険だと判断した医師は兵士に指示を出そうとした瞬間、

「お前か？」

何者かの声に遮られる。

そして、突然入口に立っていた兵士が縦に割れる。頭から股間まで真っ直ぐ割け、血が左右から噴き出し、元は一つだった肉片を汚し合う。綺麗に二等分された兵士の奥に立っていたのは黒い男だった。

男、と断定するには難しい風貌だ。黒いコートを纏い、同色の鎧の広い帽子を被っている負のオーラを放つかのような格好。襟が高くて口元も隠れ、帽子とコートの間から覗いた暗くぎらついた双眸がこちらを捉えている。

性別がどちらであったとしても、まともな人物でないことは戦場に立たない医師でも分かった。

医師はすぐにフェルミアの前に立ちほだかる。医師自身には何もできない。せめて助けがくるまでの時間くらい稼いでみせる、といった思いからの行動だった。しかし、黒い男が急に見えなくなる。体は動いていないのに何故か天井を眺めている。

医師は自分が首を斬られたことにも気づかぬまま絶命した。

魔王は魔王国へ突入することに成功した。いや、突入どころかあっさり入ることが出来た。

魔王国内は明らかに戦った後があり、見渡す限り人間と魔族の死体が転がっている。しかし、そこに生存者がいない。気配を探っても、人間も魔族も全く感じられない。

「おい。これは一体どういうことだ」

偵察に行つた魔族に魔王は訊ねる。

「いや、私が見た時は普通に人間共がここを出入りして……」

直接その光景を見た本人が一番戸惑っていた。

この者の言っていることに嘘がなければ確かにこの状況はおかしい。魔王が報告を受けてここに来るまで十分も掛からなかったのだ。たったそれだけの短い時間で、果たして人が気配も残さずに消えるだろうか。

「とりあえず、城へ向かう。道中生存者を見つけたら種族問わず保

護する」

「人間も、ですか？」

「この状況は不可解過ぎるからな。話を聞きたい。だから周囲の探索を怠るなよ」

「はっ！」

そういつて城へ駆ける。

生存者の気配へと意識を集中しながら走るが、見えるのは絶命した人間と魔族。感じるのは死の空気。まるで、死者の国にでも迷い込んだ気分だ。城に近づくにつれてその感覚がより強くなる。

城門前に着くと、魔王一同は足を止めた。そこは他と比べられない程酷い有り様だった。

百人分くらいは在りそうな人間の死体が山のように積みまれ、その全てが身体を切断されていた。胴体、四肢、頭部とバラバラに刻まれた人間が城門前の広場を埋め尽くす形で散らばっている。どれも鮮やかな切り口から、同一の武器で殺されたことが解る。

誰の仕業だ？

倒れているのが人間だけであることから、殺つたのは魔族で間違いないだろう。そして、魔王の中でこれだけの数を相手に出来る魔族で心当たりがあるのはフェルミアのみだ。魔王国最強の剣士であるフェルミアなら、高が人間百人を持ち前の技量と知恵で倒すことは造作もないだろう。しかしフェルミアがやったにしては不可解な点がある。

魔王城を護る厚い鉄製の城門がばっさりと斬られている。人間の死体同様、鮮やかな斬り方だ。その奥ではここで転がる人間の死体と同じく、身体をバラバラにされた魔族の姿が沢山あった。この城門の広間の犯人は同一人物。フェルミアがそんなことをする筈がない。

「魔王様」

と、セシリーが魔王の傍に駆け寄ってくる。

「どうした？」

「生存者を発見しました」

「………そうか。案内しろ」

「こちらです」

セシリーに案内されて魔王が向かうと、一人の人間兵士が味方だった肉の塊に上下左右と挟まれる形で横たわっていた。死体に埋まっていたせいで気配が鈍っていたのか、と内心で納得しながら魔王は肉の塊を取り払うよう命ずる。魔族たちによって兵士の上に乗っていた死体が退かされ、男の姿が露になる。

見るからに屈強そうな肉体。それも鎧ごとばっさり斬られ、手足はない。味方と自分の血で全身を汚し、荒い息で魔王を見上げている。出血の多さから生きているのが不思議なくらいだ。つまりこの兵士が斬られてからそんなに時間が経っていないことを意味する。

魔王は訊ねる。

「誰にやられた？」

「ひ、とりの………黒い、男に………」

男は誰に話してるのか解っていないのか、魔王に問われるがままたに答える。

「一人の男にお前たち全員やられたのか？」

「突然、そいつが現れて………一瞬で皆、殺やられた」

「この人数を一瞬で倒しただと!？」

魔王含め全員が男の言葉に息を呑む。

城門前の広場は、人間の死体があることと、門が斬られていることを除けば普段と何ら変わらない。

この人間の死因は何らかの刃物によるものだ。魔術を使った可能性も否定出来ないが、一瞬で大勢の人間を亡き者にしたとすれば、大規模魔術の系統を使用したと考えられる。しかし周囲に余波らしき被害は無い上に、魔術を行われた痕跡がない。大規模魔術となれば、普段の魔術では考えられない量の魔力を使うことになるため、殆んど必ずと言っていいくらいその痕跡が残ってしまう。大規模魔術が行われたのがつい先程なら尚更だ。事前にそれを察知出来ない程、魔王は愚かではない。

大規模魔術でないなら一体どうやって………。こいつが幻覚を見ていた可能性も視野に入れるべきか。いや、今はそれどころではない！

考えを振り切つて魔王はその者の攻撃方法よりも現在最も知らなければならぬ質問をする。

「そいつは今どこにいった？」

「門を、あっさり斬り裂いて、城へ……。」

最後にそう言い残して男は目を閉じる。死んだのだ。

魔王はやるべきことを理解し、全員に告げる。

「城へ突入する。中に入ったら全員で生存者及び不審な男の搜索。

男の方は見つけ次第私を呼べ。………決して交戦はするな」

『はっ！』

「では、散れ！ セシリーは私について来い」

「畏まりました」

魔王たちは城へ突入した。

フェルミアは部屋の状況をただ見ることしか出来なかった。立ち上がることも、声を出すことも出来なかった。今もただ、侵入者を睨むことしか出来ない。

「お前なのか？」

黒い男は訊ねる。顔を近づけ、表情のない顔を男はフェルミアに向ける。フェルミアが返事をしなかったからなのか、男は顔を上げる。そして、壁に刻まれた太陽と月の紋章を凝視する。

「違うのか？」

顔を向き直し、男は抑揚のない声で再び訊ねる。問われている内容の意味が解らず、回答に困る。

しかし、顔を見詰め合っている内にフェルミアは気づいた。気づいてしまった。

「あなた、まさか……………」

男はフェルミアの呟きに首を傾げる。

「はは……………噂はバカにできないものね。生きてるか、死んでるかも解らないあなたが……………一体、何を求めているの？」

やっと喋った第一声が男にとって不快だったのか、問い掛けを止めて拳を振り上げる。

何をしようとしているのか解ったフェルミアは咄嗟に近くにあったナイフに手を伸ばす。

金属と金属がぶつかる音が響く。フェルミアのナイフが砕け、包帯の巻かれたお腹が斬られる。傷口が開き、血が噴き出すのを砕けたナイフの刃が刺さるのにも拘らず手で抑えた。

こんな、ちんけなナイフじゃ防げないか………。

元々包帯を切るハサミの代わりに用意されたナイフだ。見ただけで戦闘用のものでないと判る。それでも、鉄で出来た刃に変わりない。それが砕かれることの意味をフェルミアは一瞬で理解した。

勝てない………。

実力に差があり過ぎる。例えそうでも、本来のフェルミアにはそれを切り抜けるだけの技量と実力がある。怪我をして起き上がれない程の重傷を負っているが故に、今程度の反抗しか出来ない。

男が止めと言わんばかりに再び拳を振り上げる。フェルミアは次に来るであろう衝撃に目を閉じる。

だが、攻撃は来なかった。代わりに、空間を揺らす衝撃と魔力の奔流が男が立っていた場所に流れた。

目を開けて入口を見ると、そこには愛する夫　魔王が立っていた。

## 第9話：魔王国（3）

魔王は自室へ駆け込んでから間を置かず魔術を展開する。右手を掲げ、魔王特有の歪んだ六芒星の魔法陣が完成する。そして、そこから闇色の閃光が放たれた。

迷いはなかった。フェルミアを襲っている黒いコートの人物へ容赦なく殺傷力の高い攻撃を与える。

黒衣の男は攻撃をまともに受け、魔術の奔流に呑み込まれる。部屋の壁を魔術が突き破り、自室を半壊させる。

「フェルミアっ！」

「フェルミア様っ！」

魔王とセシリーが慌てて横たわるフェルミアに駆け寄る。出血が酷いが魔王たちを首だけ動かして見上げる。生きている、という安堵と同時に妙な気配が漂う。

部屋の奥。魔王の攻撃で壁が崩れ、魔王城外の景色のみが見えるその場所で黒衣の男が佇んでいた。傷どころか服に汚れ一つ見当たらない。足が付く筈のない空の上で、まるでそこに見えない床があるかのようにこちらに歩いてくる。

魔王はすぐに黒衣の男に飛び掛る。魔術で身体を強化し、黒衣の男に殴り掛かった。

金属と金属がぶつかる音が響く。魔王は鋼鉄さえも切り裂く強度の爪で男の体を貫くつもりだった。しかしそれを見えない何かで防がれた。黒衣の男は爪を何かで防ぐ動作をしたまま静かに魔王を見上げる。魔王はその何かを掴み、それを魔法陣で包んでいく。あつという間に透明のそれに魔法陣が埋め尽くされ、途端にガラスが割れるような音が響いた。

黒衣の男の武器が露になる。持っていたのは特殊な形をした武器

だった。

分類としてはおそらく短剣だろう。全長は五十センチ程度。その先端の刃が六つに分かれて扇状に広がっている。剣というよりは、柄のある鉤爪といったところか。

その特殊な六爪剣をそれぞれ両手に持ち、魔王の爪を防いでいる。

「それで殺したのか？ この国の魔族と攻めてきた人間の軍隊を！？」

城内の魔族は、魔王が自室へ行く途中で見た者は全て殺されていた。その殺され方は、城門で見た人間のように身体がバラバラだったり、一本の剣で一刀両断されたように切り捨てられたりと、死体によってまちまちだった。統一性のなさに複数犯の可能性も考えていたが、この男の武器を見て同一犯だと判った。この武器なら出ると解ってしまった。

城内に人間がいないのは目の前の男が城門までに全滅させたからだろう。そして、城内の魔族もおそらく魔王が引き連れてきた者たちを除いて全員やられている。

問い掛けに答えない男に魔王は苛立ちが隠せない。

「何が目的でここに来た！？ どうしてこの国の住人を皆殺しにした！？」

魔王の必死の言葉も男は何も感じていないように沈黙で答える。

人間が魔王王国を襲う理由は分かる。魔族が人間を嫌うように、人間は魔族を畏怖する。だが、目の前の黒衣の男は人間とも魔族とも言えない異様な気配を放っている。種族による偏見を除いても、現在の状況から黒衣の男の目的は分からなかった。

「アイツがここに来た」

「アイツ？」

やがて黒衣の男が静かに呟いた。

「でも、国中捜してもいなかった」

「人捜し？ それならどうして殺して回る必要がある！？」

「向かってきたから」

淡々と黒衣の男は言う。その声色に感情はない。

男の態度で魔王の怒りが爆発した。

「そんな理由でっ！」

魔王の声に合わせて黒衣の男を魔法陣が取り囲む。上下、前後左右と六つの魔法陣が男を拘束する檻となる。

拘束されても黒衣の男は無表情を貫く。顔だけ動かして自分の状況を確かめている。

魔王が男から離れる。

「滅びろ！」

魔王が指を鳴らす。すると、魔法陣が黒衣の男に向かって移動直撃する。

途端、男を中心に閃光が炸裂する。そこで起こった爆発も、その衝撃も魔法陣の檻の中で暴れ回り、外には漏れない。爆発によって生まれた煙が充満して中が見えない。

魔法陣を開放すると、陣内で溜まっていた煙が溢れ出した。爆発後特有の臭いが鼻を突く。一瞬で煙が散り、明けた場所には何も残らない。

魔王が放った魔術は成功すれば、攻撃対象の肉体すら残らないも

のだ。だから、この光景は何も不思議はない。  
だが

「……………逃げたか」

魔王は齒噛みする。

逃げ場のない檻の中で黒衣の男を死体も残らない灼熱の中で爆死させた。見た限り何も不思議はない。“見た限りは”。  
爆発後特有の臭いを嗅いで魔王は呻く。

焼死体特有の肉が焼けた臭いがしない。

一瞬で焼却した死体であっても、案外臭いは残ってしまうものだ。  
嫌な臭いであればある程に。

だが、今はそれがない。

理由は単純。そこにいないからだ。

魔王はあの状況でどう逃げたのか興味があつたが、今は置いておく。近くに気配がない以上、黒衣の男は少なくとも魔王国外の領域まで離れている。一旦の危機は去つた。

今はっ！

魔王はフェルミアの元に戻る。

フェルミアはセシリーによって止血を行われている最中だった。押さえられた白い布はすぐに血液を吸い、あっという間に真っ赤に染まる。それから再び新しい布へと交換していく。しかしそれもすぐに血で汚れる。

魔王が交戦中ずっとその作業を繰り返していたのか、セシリーの隣には赤く濡れた布が散らばっている。作業を行っていたセシリー自身の服もフェルミアの血で濡れていた。

「……………魔王様」

セシリーは一瞬驚いた顔をしてから、縋るような目で魔王を見上

げてくる。近くに寄って初めてそこに魔王がいることに気づいたようだ。セシリーの顔には精神的な疲労が見て取れた。こんなにも弱々しいセシリーを見たのは魔王も初めてだ。

「フェルミアの容態は？」

「血が………血が止まりません」

涙声でセシリーが答える。

新しい布を交換しようとしたところでその手を掴まれる。

「もう、いいから………」

「ですが、フェルミア様！ここで止血をしなければっ！」

「良いのよ、セシリー。もう良いの………」

そういつてフェルミアはセシリーから手を離れた。掴んだ場所にはフェルミアの血がべっとりと付いていた。セシリーはフェルミアの言葉に抑えていた涙を流し、嗚咽を漏らさないように口元を押さえる。

フェルミアがセシリーから魔王へと目を向ける。

「あなた………やっと来て、くれた」

「ああ、私はここにいるぞ」

魔王はフェルミアの手を握った。その瞬間全身がぞつとする。

何だ、この冷たさ。

生暖かい血に濡れながらも、握ったフェルミアの手は凍ったように冷たかった。

「もっと近くに、来て。ここからじゃ………あなたの顔、遠くに見えない」

「え」

魔王とフェルミアの距離は体格の違いから、本来お互いの顔が二メートル程離れている。だが今は、寝ているフェルミアを覗き込むように魔王は屈んでいる。お互いの顔の距離は一メートルもない。決して遠くはない。

魔王は震える手でフェルミアを抱きかかえた。手を握った時とは比べ物にならない冷たさに、思わず氷を抱いている錯覚に陥りそうになる。新しく身体から流れた血が熱く感じる程だ。それに、

軽い。

酔い潰れてベットに運んだ時よりも、体に乗せた時よりも、好き放題に引つ張り回そうとするのを止める時よりも。ずっと。抱きかかえて初めて気づく。フェルミアが横たわっていた場所には赤い水溜りが出来ていた。身体よりも、自身の血を吸った服の方が重く感じる。服で吸い切れなかった血が背中に伝って今も水溜りにぼつぽつと落ちる。

こんなに血を流したら、もう身体に何も残ってないじゃないか！

目に見える形で命が抜けていく。その事実の魔王は戦慄する。そんな中でもフェルミアは微笑み、魔王を見る。

「温かい……あなたの手、すごく温かい」

「ああ」

「もう、あなたは魔王なんだから。すぐに泣いちゃ駄目だって……昔から言ってるのに……」

いつの間にか流していた涙を拭こうとフェルミアの手が伸びる。しかし、届かない。真つ直ぐに伸ばせば届く距離にある魔王の顔でなく、虚空を掴み続ける。

それを魔王は自分の顔に引き寄せる。

「フェルミア！ 私は……私はここにいるぞ！」  
「わかつてる……わかつてる」

静かに、フェルミアは言う。

「ごめん、ね」

「何を謝っている？」

「あなたの、赤ちゃん……産んで上げられなかった」  
「……っ！」

魔王はその言葉に再び涙がこみ上げて来る。

フェルミアは知っているのだ。もう子供が 自分が助からないことを。これだけの出血では生きている方がおかしいのだ。それをフェルミアも解っているのだろう。

「そんなことはない。まだ諦めるな！ セシリー！ 医者 は 医  
者はいないのか！？」

セシリーの反応は声にはならなかった。涙を流しながら首を横に振る。

答えは魔王にも最初から分かっていた。部屋に入った時からそこに医師の死体を転がっているのを見たから。それでも訊ねずにはいられなかった。

街の医師もいない。魔王と共に来た魔族の中にもいない。魔王やセシリー自身も医術の心得がない。

ここには、ただフェルミアが死ぬという事実があるだけだ。頭では理解していても、言葉にするのが何よりも恐ろしかった。助ける方法は最早皆無。魔王はあらゆる魔術を習得しているが、属性の都合から神聖系のような治療が出来ない。使えるのは、ただ誰かを傷

付け、殺す魔術のみだ。魔王は己の妻のが目の前で死に掛けているのに、何もしてやることも出来ない。

フェルミアは全て解つてると言わんばかりに微笑みながら魔王の頬を撫でる。

「大丈夫。あたしがいなくなっても、あなたを支えてくれる人が沢山いるから」

「ああ」

「だから、もう泣かないで。笑って。最後にそんな湿っぽい顔はやだな」

「ああ………！」

魔王は笑った。フェルミアの最後の願いを叶えるために精一杯に笑顔を作る。

しかし、それでも涙は止まらない。寧ろ多くなっていく。

「後のことは任せろ。全部うまくやってみせる」

魔王は溢れる涙を誤魔化すために言葉を続ける。もう叶わない嘘を付き続ける。

「人間が何千、何万と攻めて来ようと絶対に民を守ってみせる」

「うん」

「魔族が平和で在り続ける未来を必ず作ってみせる」

「うん」

「私たちの理想は叶う。これから幸福な生活を送る魔族どんどんが増えていく。だから」

嗚咽でうまく言葉が出ない。言いたいことが山ほどある筈なのに、うまく出てこない。

「フェルミアもそこに……」

「そこにいられないけれど。あたしの分まで幸せになって」

魔王の言葉を遮ってフェルミアが告げる。

「幸せに……みんなが平和に暮らす国を　理想を……」

言葉は続かなかった。

フェルミアは静かに目を閉じ、魔王の頬に触れていた手が落ちる。止まらなかった血がもう流れない。魔王の腕の中には眠ったように動かないフェルミアがある。

その事実にも、魔王は

「あああああああああああああああああああああ  
！」

慟哭する。喉が張り裂けんばかりに絶叫する。

そして、壁に刻まれたシフィアの紋章を睨む。

シフィア　この国が、魔王国を……フェルミアを  
殺した元凶！

フェルミアをゆっくり下ろし、魔王は立ち上がる。隣には何やら  
決意したセシリーの姿が、部屋の入り口には駆け付けた魔族たちが  
いる。

魔王は宣言する。

「全ての元凶はシフィア王国！　仇を討つため、死んだ者に報いる  
ため　奴らを滅ぼすぞっ！」

魔王の決断を否定する者は、この場にはいなかった。

「その後はご存知の通り、シフィア王城で魔王くんはクリスちやんに負けて封印される。以上が大戦での裏話つてやつね」

何気なく言うエストレイアの言葉にクリスティーナはハツとなる。周囲を慌てて目だけで確認する。

クリスティーナは温泉に浸<sup>つ</sup>かっていた。隣には、フェルミア様、と感傷に浸<sup>ひた</sup>っているセシリーがいる。

どうして自分がこんな状況なのか解らないクリスティーナは今まで経緯をよく思い出す。

確かエストレイアに誘われて温泉に来て。それから……。思い出せない。

気づけば魔王の過去を視せられ、何事もなかったかのように三人で温泉に浸かっている。

「ん？ どつたのクリスちゃん？」

「何、今の……？」

「へえ、魔王くんの過去を視せられたことよりも先に、どうして温泉に入ってるか訊いてくるかと思っただけどそっち先訊くんだ」

と、エストレイアは言ってくる。何もかも見透かしたような目でエストレイアはクリスティーナを見返す。

「一種の意識を誘導する魔術でしょ」

それに反抗するかのように、やや棘のある言い方でクリスティーナは答える。解らないとはいえ、大体は予想のつく手法だ。

クリスティーナの回答にエストレイアはニタニタと笑う。

「まあ、正解っちゃ正解だね。うん。良い答えだよ」

「何よ。あっさり当てられて僻ひがんでるの？」

「いやいや。誘導したのは事実だけど、魔術じゃないんだなこれが」  
「じゃあ何よ。催眠術とでも言うつもり？」

「んー、似たようなもんかな。やったのはね、あて特有の能力ってやつでね。何て説明すればいいかな……」

「特殊能力？」

「そうそう、それ！ さっき視せた魔王くんの過去の記憶もあての特殊能力」

おどけた調子のエストレイアに対して、クリスティーナは冷静に彼女曰くの特特殊能力を分析する。

クリスティーナは魔王のことを知りたかった。そこをエストレイアに心理的に突かれた。クリスティーナの興味を誘い、精神に干渉。その後温泉へと誘導し、魔王の過去を視せられた。

だが、疑問がある。

魔王の過去に詳し過ぎる。

魔王を詳しく調べなければ、あそこまでエストレイアは知ることが出来なかった情報だ。偽りでないことはセシリーを見れば一目瞭然。それでも詳し過ぎる。当時あの現場に居なければ分からないことばかりだ。

「随分と詳しいですね。もう一度あの光景を見る日が来るとは思いませんでした」

セシリーが静かに言う。若干挑発する目でエストレイアを見ている。それでもエストレイアは態度を改めることなく対応する。

「あての特殊能力の一つなんだけど。他人の記憶を視たり視せたり出来るんだよ」

「他人の記憶を……?」

「そうそう。あては“魔王”のことを個人的に調べててね。だから探らせてもらいました」

「まさか、魔王国の生き残りに逢ったことがあるんですか!？」

セシリーが驚きで声を上げる。

魔王国の生き残り。大戦時に魔王と共に行動していた数十名の魔族。現在の生死は不明で、辛うじて逃げ延びている者がいるとかいないとか……。シフィアでも噂になっていた。

「いや。あてもそっちの方をまず捜したけど無理だった。生き証人が見つからないから代わりに眠っている人から拝借したのさ」

「それはもしかして……?」

「そう。封印されている魔王くんの身体」

「そんなことが出来るの?」

「記憶は魂に刻まれ、脳に記録として保存されている。封印越しでも問題ないさ。何せ、あては神だもん」

自信気に小さな胸を張るエストレイア。

とりあえず、とクリスティーナの方を見る。

「魔王くんの過去　大戦時の裏話の一部を見れた感想は?」

「感想って言ったって……?」

不意の問い掛けにクリスティーナは戸惑う。クリスティーナとしても突然過ぎて気持ちの整理が出来ていないのだ。

「まあ、あてから見れば問題なしか、な。後は……自分た

ちで話し合つと、良いよ」

「え、エストレイア？」

表情を変えずに沈んでいくエストレイアにクリスティーナは慌ててその腕を掴む。体中が真っ赤だ。顔を覗き込むとエストレイアはぼうつとクリスティーナを見ている。いや、見えているかどうかさえ疑問だ。

「……………結構長い時間浸かっていましたからね」

「そういつことね」

クリスティーナは呆れながら逆上<sup>のほ</sup>せたエストレイアをセシリーと共に温泉から引き上げた。

## 第10話：魔王国（4）

クリステイーナは逆上<sup>の逆</sup>させたエストレイアの看病をセシリーに任せ、山の中を歩いていった。

冗談半分で言ってみただが、あっさり出歩く許可が出た。驚きつつも、その言葉に甘えさせてもらうことにした。エストレイア程ではないが、クリステイーナも身体が火照って風に当たりたかったそれに、今は一人で居たい気分だった。視界に入らないところから天使の監視が続いているが、今のクリステイーナには気にならない。大戦の裏側。魔族側の事情。

魔王国が魔族を大陸中から集めて回っていることはシフィアでも知っていた。それはいつか人間と戦争するための準備だと、シフィアを含め近隣の国々では考えられていた。クリステイーナ自身その考えに疑いはなかったし、寧ろいつでも立ち向かえるように剣を磨いていた程だ。しかし、それは間違いだった。魔王国が魔族を集めていたのは、戦争の戦力を増幅させるためではなく、ただ住人を仲間を増やしたかっただけだ。

特別なことではない。それを人間は検討違いしてしまった。だから、大戦は起きてしまった。要因はそれだけではないが、人間による魔族への偏見がより酷い戦争へと発展させてしまったことに間違いはない。

魔王が暴れたことによつて多くの国で被害が出た。だが、その発端は愛する人々の死から始まった。何者かに妻を殺され、人間たちによつて国民を皆殺しにされた。そんな魔王を一方的に非難する権利は誰にもない。

『 何の野望もない小娘が……我が願いを阻むんじゃないっ！』

シフィア王城の決戦で魔王がクリステイナーに言った言葉。

この言葉はまさにその通りだった。魔王の全力の訴えをクリステイナーが一方的な理由で押し付けた。

魔王の願いは愛する者たちと平和に暮らすこと。

その何がいけないことなのだろう。当たり前で、理想的な願い。それを人間が　クリステイナーが阻んだのだ。誰かの策略であったとしても、最後はクリステイナー自身の手で終わらせたことだ。怨まれることはあっても、怨むことはあってはならない。

大戦時の魔王による襲撃で両親を失ったことも、封印中にリブラークに裏切られて国を奪われたことも、それで恋人のクルスが死んだことも。

全ての元凶は人間　クリステイナーなのだ。

「どうして、今まで気づかなかつたんだろう……」

クリステイナーはポツリと疑問を口にする。

本当に何故気づかなかつたのだろう、とクリステイナーは思う。

魔族は邪悪な存在。そう幼少の頃から教育されていた。だから、国を守るため、そして魔族を倒すために剣や魔術を磨いてきた。そのことに少しも疑問を抱かなかつた自分自身を今になって疑う。

魔族も人間も変わらない。それはエストレイアに視せられた魔王国の光景を見れば一目瞭然だ。魔族だって人間のように笑うのだ。大切な者のために毎日を生懸命生きているのだ。それを邪悪な存在だとどうして言い切れるのだろうか。

「わたしは取り返しのつかないことをしたのね」

今更ながら痛感する。

魔王を倒した英雄ではない。魔族を追い立てた卑怯者だ。

クリステイナーは自分自身をそう思わざる得ない。

何が正しくて何が間違っているのか、解らない。これからどうやって償えば良いのかも。その答えが見つからないクリスティーナは山道を歩き続ける。

すると、見覚えのある場所に出た。最初に訪れた平地だ。いつの間にか戻ってきたらしい。あの時はまだ魔王を恋人のクルスと勘違いしていた。あれからそんなに長い時間経ったわけでもないのに、今は遠い昔のように感じられる。

何となく周囲を見渡すと、今度は見覚えのある背中を見つけた。

「……………クルス」

恋人の背中。否、恋人の姿をした魔王だ。横に積み上げられた木々に腰掛けながら月を眺めている。

今まさに考えていた人物の登場にクリスティーナは足が止まる。思考が止まり、動けなくなる。クリスティーナは魔王の背中を見つめ続けた。

「いつまでそこにいるつもりだ」

こちらに振り返ることなく魔王は言う。誰に対しての言葉かわからないクリスティーナではなかった。どれだけ時間が経っただろうか。魔王に気づかれたらしい。

「話がある。こっちに来い」

誘われ、戸惑う。しかし、迷ってばかりもいられない。クリスティーナは一步を踏み出した。

セシリーは温泉で逆上せたエストレイアを看病していた。

体を冷やした方が良いとはいえ、流石に全裸にしたまま放置するのは心苦しかった。そう思ったセシリーは身体をよく拭いてからエストレイアに服だけ着せて頭を自分の膝の上に置き、背中の翼で器用に扇ぐ。幸いにもエストレイアの服は露出が多くて丁度良かった。それにしても、とセシリーは思う。

堂々と温泉に入らせた時や今こうして看病していても、周囲を監視している天使は見ていただけで寄って来る様子がない。主が逆上せただけだとはいえ、倒れたのは事実だ。普通他人任せにするだろうか。況してや、セシリーは今日出会ったばかりの他人だ。それに種族柄馴れ合えるとは限らない。セシリー自身はエストレイアに対して多少疑惑はあっても不快な気持ちは抱いていないが、天使の立場としてはそう安易な考えは持っていない筈だ。

信頼されているのでしょうか。

主であるエストレイアを任されるということはそう解釈する他ない。だが、信頼されるようなことをした覚えがないのも事実。

魔王様の過去を天使の皆さんもご覧になったのでしょうか。

それならば少しは納得が出来る。自分の主の過去にはそれだけの動機があった。それでも、やはり足りないと思った。その足りない何かが今のセシリーには分からなかった。

暫くすると、エストレイアがぼんやりと目を開けた。

セシリーと目が合う。

「んにゃ〜。おはよう。セシリーちゃん」

「おはようございます。時刻としては間違っていますか」

「細かいこと言わないの」

そういつてエストレイアはセシリーの膝から起き上がった。

「あっ」

「ん？」

思わず出してしまった声にエストレイアは首を傾げる。

「どつたの？ 物寂しげな顔して」

「……いえ。膝枕をするのが随分と懐かしかったもので」

「あーそついや、魔王くんと出会ったばかりの頃によくやってたもんね」

「そんな昔のことまで分かるのですか」

「まーね。……それじゃセシリーちゃんのご希望に応えま  
すかな」

エストレイアは再びセシリーの膝に頭を乗せて横になる。乱れた前髪をセシリーが手で整えるとエストレイアはくすぐったそうな顔をする。その姿は第三者から見れば、仲の良い姉妹と誤解するかもしれない。

「魔王様のこと……どれだけご存知なのですか？」

「魔王くんのことなら何でも。ファンですから」

何気ないセシリーの質問にエストレイアは平然と答える。

「でも、“魔王”のことは正直あんまり分かんないなー」

エストレイアは変わらず喋り続ける。対してセシリーは表情が暗くなる。

「だからさ、セシリーちゃんの記憶をちよろつと見てみたいなーなんて思ってたりする」

「それは堅くお断りさせていただきます」

「だろうね。それとも話せない理由でもあるの？」

「自分の過去を覗かれても良いと言う人などいませんよ」

「そう言われると返す言葉がないな」

からかうように笑うエストレイアにセシリーはどうしたものかと困惑する。エストレイアの言っている内容がどういった意味なのか解る故にセシリーは答えられない。

話を逸らすため、それよりも、と切り出す。

「どうして魔王様とクリスティーナ姫を今になって二人きりにしたのですか？」

「二人には一度お互いに本音で語り合ってもらわなければならない。魔王さんの正体をバラした手前で言うのもなんだけど、あの状態じゃ話にならないからね。冷静に考える時間を作る意味でもクリスちゃんには魔王くんの大戦時の過去を視てもらいたかった。その方が少しは魔王くんに対する認識も変わるだろうしね」

そこまで考えていたのか、とセシリーは心の中でこっそりと感心する。見た目や言動で甘く見てみるとセシリーは改めて思わされる。

「問題は魔王くんの方だけど………そこんとこセシリーちゃんから見てどうよ？」

「魔王様なら大丈夫です」

セシリーははっきりと言い切った。

「魔王様はきつともう クリスティーナ姫を許しています」

「………意外。どうしてどう思うの？」

セシリーの迷いのない答えに今度はエストレイアが驚いた顔をす

る。

「魔王様は世界で一番お優しいお方ですから」

セシリーは魔王が魔王国を建国した根本的な理由を知っている。

建国前からずっと側で仕えているのだから当然だ。

平和。

ただそれだけを望み、求めて魔王国を造った。魔族同士でいつまでも笑っていられる理想郷を描いて造られた魔王国。実際、魔王やフェルミアが望んだ国が出来上がり、日々善くなっていた。怨みや憎しみとは無縁の場所だと言っても過言ではない。そこを造り、そこで暮らした一人としてセシリーは自信を持って言い切れる。

何故なら、魔王国を造った王が何よりもそれを望むから。誰よりも優し過ぎる魔王は誰よりも怨みや憎しみとは無縁なのだ。辛い目に遭っても、愛する者を奪われても、魔王は憎しみ切れない。誰よりも優しい魔王の最大の長所であり、短所だ。戦争を起こした人間は赦せなくても、その戦いで同じように大切な者を失ったクリステイーナを許している。

それは決して同情ではない。魔王はクリステイーナを一人の人間として見ている。大戦当時から一年後の現在までクリステイーナは失ったことに負けず、今に至ることを魔王は解っている。未来のシフィアの王として育てられ、魔王を倒すほどの力を持っている。所詮は十年とちょっとしか生きていない少女なのだ。苦労と苦悩なしに今日まで来れるわけがない。継る相手を奪った魔王だからこそ、それを深く理解している。直接本人から聞いたわけではないが、それに気づけないセシリーではない。

「だから、大丈夫です」

魔王の使い魔は自信を持って言った。

## 第11話：魔王国（5）

「いつまでそこにいるつもりだ」

いつまでも突き刺さる視線に苛立ちながら魔王は言った。それでも視線の主の動く様子がない。

「話がある。こっちに来て」

動かぬのなら呼ぶしかない。言って振り返ると、困惑したクリスティナの顔があった。目が合うと迷うように視線を逸らす。だがすぐに決意した目で魔王を見返し、こちらに歩み寄って来る。

「隣、いい？」

「ああ」

魔王が許可すると、クリスティナは隣に腰掛けてくる。

隣、と言つてもクリスティナは敢えて少し離れた場所に座った。二人の間には人一人分と少し空いている。片方では手が届かない距離。しかしお互いが伸ばせば届く長さ。近いようで遠い距離。それが今の二人の心の距離でもあった。

クリスティナは座ったが良いが、何を言っているのか解らないのか俯いて黙っている。それに対して魔王は隣に座ったクリスティナに見向きもせず、空高くにある月を眺める。

今夜は雲一つ無く、満月がはつきりと映っている。そのお陰で月明かりだけでお互いの姿がよく見える。

「今日は月が綺麗だな」

「………そうね」

「月は形こそ光加減で変わるが、その姿は結局は変わらない」  
「何が言いたいの……?」

クリステイーナが魔王を怪訝な顔で見る。

「毎日のように見る月は変わらないのに、それに照らされる私たちは日に日に変わっていくなあ、と思ってな」  
「……」

自分で言ってから、魔王は本当に変わったと改めて思う。

一年前まではフェルミアや魔王国の魔族たちに囲まれて平和に暮らしていた。しかし今はフェルミアも仲間だった魔族たちもセシリを除いて全員死んでいる。魔王国も存在しない。

何より、魔王自身が魔術を扱えない人間になっているのが驚きだ。魔族とて人間と同じように寿命がある。だからフェルミアや他の魔族が亡くなっても不思議ではない。だが、自分の姿が変わることとは普通なら起こりえない。こんな状況を一年前に誰が想像できただろうか。

「さつき……エストレイアにあなたの大戦の時の過去を視せてもらった」

クリステイーナが搾り出すように言う。

その話は先程、天使に聞かされていた。自分の過去を覗かれるのは嬉しくないが、ある意味効果的ではあるため敢えて口出しはしなかった。魔王自ら語るよりも、当時の出来事を見た方が理解が早い。セシリーが傍にいたから真偽はすぐに確かめれる。

「何というか、うまく言えないけど……ごめん」

小さな子供が叱られたような顔でクリスティーナは魔王に謝罪した。

顔はしっかりとこちらに向けるも、視線は下に下がっている。声も弱々しく、唇は震えているのが見えた。旅を一緒にしてからも、人間クルスの記憶からも、こんなクリスティーナを見るのは珍しい。

「謝って済む問題じゃないって解ってる。でもわたし、どうしたら良いのか分からなくて……」

「確かに謝って済む問題ではない」

「……」

「だが、クリスティーナが私に謝ることではない」

「え」

おそらく予想とは違う反応に驚いてクリスティーナが目を見開く。

「あれは戦争だ。クリスティーナ一人のせいではない」

「だけど……」

「もういい。お前は十分に苦しんでいる。それよりも」

「何でよっ!」

魔王の言葉を遮ってクリスティーナは立ち上がる。その顔は怒りに染まり、目には涙が浮かんでいる。

「何でそんな冷静なのよっ! さっきのわたしのように 大戦の時みたいに怒鳴り散らせばいいじゃない! どうしてそんなに落ち着いてるのよ。わたしに気を使ってるの? それとも同情? そんなことされても嬉しくないわよっ!」

恋人の死を知った時と同じ真っ直ぐな怒気。

クリスティーナの思いが怒りと共にまくし立てられ、魔王に向け

られる。そのやり場のない怒りを魔王は知っている。だから、教えてあげなければならない。

「同情に近いかもしれない」

「何よ、それ」

「お前が恋人の死を知って、怒り、悲しんだあの姿に私自身を重ねてしまったからだ」

「……!？」

クリステイーナが何とも言えない顔をする。驚いているようにも、悲しんでいるようにも見える。

魔王はそれでも続ける。

「だからといって、全てを感情移入するつもりはない。人間わたしたちと魔族はお互いにあの大戦でやってはならないことをした。“戦争だから”というのは単なる逃げ口実だ。故に、私たちは王として何らかの責任を取らなければならない」

「王としての、責任……!？」

王になるまでにはいくつかの通過点がある。それは礼儀作法だったり、世界情勢の把握だったり様々だ。国によって異なることもあるが、王族の後継者が成人、或いは現王の引退に合わせて準備を進めていくのが通例である。

しかし、例外も当然存在する。戴冠式たいかんを前に王が急死した場合だ。今回の場合は魔王のシフィア王城急襲によって王も王妃も亡くなっている。唯一の後継者であるクリステイーナは成人になる前に王にならざるおえなかった。更に王と共にそれを支えていた重役たちも魔王によって殺されているため、うまく引き継ぎが行われたとは思えない。

王としての覚悟も責任も、他の通例の儀式を行った者たちより足

りないだろう。一緒に旅をされていて、それがよく解った。個人としては悲しみに耐えていても、一国の王としては考えが足りてないと思える。大方、リブラークなら自分より民を幸せにしてくれると思いい込んでいるのかもしれない。民より魔王を優先したところから容易に想像ができる。セシリー曰くの「リブラークなら大丈夫」の心理はクリステイナにも働いているのだろう。

だが、それも言い訳だ。望む望まないは関係ない。一度王となつた以上、責任は最後まで全うしなければならぬ。

「私たちは守るべき国を失った。失った者のためにも、大戦の真実を暴かなければならない。二度と、同じことを繰り返させないために。それが私たちに出来る数少ない償いの一つだ」

「大戦の真実つて……」

「あの戦争は明らかに誰かの策略だ。いくら各国の連合軍で固められていたとはいえ、僅か数日で魔族の軍隊を壊滅されるわけがない」

大戦は魔王が魔王国を離れた時に起こった。それもすぐには戻つて来れない程離れたところだ。その間はフェルミアに魔王国を託していたが、これも戦争を仕掛けられる前に夜襲を受けている。魔王国でも信頼の厚いフェルミアの負傷は魔族たちの冷静さを失わせた。怒りや悲しみ、恐怖といった感情が溢れて指揮も乱れた。そのせいであつたという間に制圧され、籠城を余儀なくされた。

「人間の軍の襲撃のタイミングがあまりにも良過ぎる。クリステイナは当時どう聞かされていた？」

「分からない。当時は増援として魔王国へ向かつてる途中だったもの。作戦会議なんて参加できる立場じゃなかったし。少しでも腕の立つ兵士は前線へ送り込まれてから」

「何も聞かされていない、か……」

「……………うん」

クリステイーナを見る限り嘘を付いて様子はない。寧ろ混乱して  
るようだ。

「ならば、知りたくはないか？ どうしてあの戦いが起こったのか」

「知りたい……………知りたい！」

「それならば、共に探そう。大戦の真実を　私たちの償いを」

魔王は立ち上がり、手を差し出す。

滅ぼすのではなく、共に歩み続ける。これが人間に国を、仲間を  
妻を奪われた魔王の答えだった。

「あ……………」

「大戦の真実を暴いたからといって全てが許されるわけではない。  
だが、その後は今の私でも何をすれば良いのか分からない。だから、  
共に見つけてほしい」

戸惑った顔でクリステイーナは差し出された手を見つめている。

急な申し出による困惑か、恋人の姿をした魔王と一緒に行動する  
ことへの拒絶か、まだ自分の中で整理が終わっていないのか。自分  
の手を胸元でギュツと寄せる。

やがて、決意した顔で口を開く。

「約束して」

「何をだ？」

「わたしはあなたを裏切らない。だから、あなたも絶対にわたしを  
裏切らないで」

両親を殺し、国と恋人を奪われるきつかけを作った魔王。それと

共に歩む道は過酷でしかない。しかしクリスティーナは敢えてそれを選ぶ。その誓いの前提を提示する。

魔王もそれに応える。

「ああ。約束する。私たちは共に生き、共に罪を清算する同志だ。決して裏切らず、どちらかが死ぬことも許されない」

「解ってる。わたしも……王としての責任を果たすわ」

クリスティーナが力強く魔王の手を握る。魔王もその手を握り返す。

「王である以上、一度交わした盟約は死んでも守らなければならぬ」

「ええ、必ず」

お互い手を離す。まだ温もりの消えない、約束を誓った手を見る。魔族の王として、亡くなった者たちに報いたい。亡くなった者が生き返らない以上、これより犠牲と悲劇を出さないために魔王は立ち上がる。まずは大戦の裏を引いていた者を暴き出し、二度と繰り返させないようにするにはどうするべきか考えなければならぬ。いつまでも、悲しんでばかりいられない。復讐という現実逃避から魔王は改めて目を覚まし、新しい同志を見る。

クリスティーナも握っていた手を開いては閉じてを繰り返している。きつとクリスティーナも今後について何らかの決意をしているに違いない。だがその頬が少し赤く、やや落ち着きがないようだ。

「ねえ、もう一つ確認したいことがあるんだけど……いい？」

「何だ？」

どうしたんだ、と魔王が思っているとクリステイナが訊ねてくる。

「十秒だけ目閉じて動かないでくれる？」

「構わないが………一体何をするんだ？」

「いいから！」

怪訝に思いながらも言われるがままに魔王は目を閉じる。すぐ近くでクリステイナが息を呑む感じがする。吐息が掛かり、殆んど密着していると喋っていい距離まで詰められる。

何をする気だ？

未だにクリステイナの意図が見えない魔王。

すると、両頬を柔らかい何かを押さえた。それがクリステイナの両手だと気づいた直後、彼女の方に引き寄せられ、頬に当てられたものとは別の柔らかい感触が唇に伝わる。驚いて目を開けると、眼前に目を閉じたクリステイナの顔があった。キスされている、とそこで初めて気づく。唇同士が触れただけのキス。それがきっかり十秒続いた。

十秒後にクリステイナが唇を離し、目を開ける。吐息が漏れる。キスする前と違って頬も元の色に戻り、落ち着いている様子だ。

「ちゃんと目閉じてて言ったでしょ」

「あ、ああ………いや、そうではない。何だ今のは!？」

魔王が取り乱すのに反してクリステイナはこちらに笑いかける余裕がある。

「確認したいことがあるって言ったじゃない」

「だから、何だそれは」

「あなたはクルスじゃない」

クリスティーナの言ったことに魔王は思考が止まる。

「おへその下にグツと来るものがない。心が躍らない。胸が苦しくない」

「服のサイズは合っている筈だから胸は苦しくならないと思うが・

・・・・？」

「何だよ！」

的確な突っ込みにクリスティーナの非難を浴びる。わけがわからない、と魔王は首を傾げる。

「何がしたかったんだ」

「クルスは本当に死んだんだなあって思っただけよ」

「・・・どういうことだ？」

「好きな人とキスすると何かこう、幸せ！ って感じるじゃない。それが今なかった。それだけよ！」

好きな人とキスすると幸せ、か。

これは魔王にも解る。確かに想い人以外としてもその感情は生まれない。

「いきなりしちゃったけど・・・もしかして、怒ってる？」

「いや、別に。ただいきなりあんなことをやられるとこちらとしては身が持たない。・・・色々と疎いんだ」

「確かに。わたしの胸チラツと見ただけで鼻血噴く程だもん。そういうところ子供よね」

「からかうな」

「ごどもー」

「うるさい！ そっちの方が子供だろう！」

魔王とクリスティーナは笑う。

敵だった二人がこうして笑い合える。だからきつとこれから何とかなる。具体的な理屈はないが、魔王はそう思う。そう、信じられる。

「奥様、見ましたか。あの二人もうデキちまってますぜ」

「ええ。予想を上回る展開にわたくしも喜びを隠し切れません」

不意に、二人の聞き覚えのある声が耳に入る。魔王とクリスティーナがほぼ同時に声の方へ振り向く。

そこにはニタニタ笑いのエストレイアと満面の笑みを浮かべたセシリーが茂みからこちらを窺っていた。更にその後ろには力天使一体と権天使数十体が詰め寄せている。力天使は相変わらずの無表情だが、権天使たちは何やらヒソヒソと話しながら盛り上がったのが見えた。

「な、何故そんなところにお前たちが!？」

「い、一体いつから!？」

慌てふためく魔王とクリスティーナ。

エストレイアとセシリー、力天使の三人が茂みから出てくる。権天使たちは茂みからは出てこないものの、興味津々と見守っている。

「いつからと言われると……魔王くんがクリスちゃんに」

今日は月が綺麗だな』ってロマンチックに囁いた時からだね」

「ロマンチックに囁いてなどいない!」

「魔王様。とても素敵でした。わたくしも思わず魅入ってしまいました」

「そんな感想も求めていない!」

「……………ていうか最初の方からじゃない。逆上せて寝てた筈なのにわたしと別れてから付けてたの？」

クリスティーナの問いにエストレイアは首を軽く横に振る。

「ううん。監視役の権天使の一人から『これから面白くなりそうです！絶対見所ですっ！』って言われてから、こりゃー寝てる場合じゃねえ！って飛び起きて駆けつけたのさ」

「その権天使連れて来なさい。しばくわ！」

拳を握るクリスティーナにエストレイアは、まあまあ、と押さえる。

「それよりも二人が仲直りしてくれて良かったよ」

「仲直りも何も……………」

「仲直りだよ。二人は本当なら仲良しなんだからさ……………それで、これからどうするの？」

話を盗み聞きしていた筈なのにエストレイアは敢えて確認する。その答えを魔王とクリスティーナは迷わず口にする。

「これからも旅を続ける」

「二人……………いいえ、三人で」

クリスティーナがセシリーの方を見ると、微笑み返してくる。答えは、聞くまでもない。

それを聞いたエストレイアが、そっかそっか、と満足気に呟く。

「それならこれを上げよう」

エストレイアが何やら用紙を力天使から受け取り、魔王とクリスティーナに差し出す。

「何だこれは？」

「入国許可書。今のきみたちは国籍がない状態なんだよ？ それなのにどうやって入国するのさ。ルーニスとは違うんだよ」

呆れた声でエストレイアが魔王を見る。

エストレイアの言う通り、ルーニスのように大陸全土の国があったり国内を通過できるわけではない。国境沿いに入国チェックを行う国も当然存在する。その際に必要なのが、国籍などの個人情報を書かれた入国許可書だ。本来ならしっかりとした施設で申請して作成もらうものだ。

魔王が使っている身体の主やクリスティーナは国籍としてはシフィアだ。しかし現在シフィアはリブラークに奪われたため国籍がそのままでは通用しない恐れがある。占領後に残った民にはそれなりの措置をした筈だろうが、魔王たちにはそれが無い。

そういった場合は、有力者や名のある組織の紹介状があれば国籍が不明でも通用する。魔王たちのように戦争で国を追われた者や、大陸中を旅して回る商人たちなどに対する処置だ。

魔王が手渡された入国許可書には紹介者の欄にエストレイアの名前がある。

「これで通用するのか？」

「通じる通じる。ヴァナデイス専用だけどね」

「ヴァナデイスに知り合いがいるのか？」

「いるよー。一番偉い人に渡してって門番の人に伝えてね。きつと無視は出来ない筈だからさ」

「ああ。わかった」

入国許可書をリュックの中に大切にしまい、空を見上げる。いつの間にか月明かりではなく、昇り始めた太陽で周囲が明るくなっていった。朝日の光が眩しく見える。

「結局朝になっちゃったわね」

「ああ。今から出発すれば夕方にはヴァナデイスに着けるだろう」

「徹夜したのにハードだなあ」

「我慢しろ」

「分かってるわよ」

文句を言いながらもクリスティーナは旅の準備を始める。魔王もリュックを整理しようとする。そこで没収されていた筈の剣がリュックの横に置かれているのに気づく。エストレイアをチラリと見ると、惚けた顔くぼをする。魔王は呆れながらも敢えて訊ねず、いつも通り腰に差す。

クリスティーナも剣を背中に背負い、旅の準備を終える。

「一旦お別れだね。色々迷惑かけて悪かったよ」

「そうだな。だが、一応世話になったと言っておこう」

「素直じゃないねー。まー今回はあてにも非があるから人のこと言えないんだけどね」

エストレイアは苦笑いで言う。

「一旦つて言ったけど、次はいつ会えるの？」

「んーわかんない。一応仕事があるからね。なに？ 寂しくなっちゃった？」

「違うわよ！ また今回みたいな登場されると心臓に悪いからよ」

「なら次はもつと驚く登場にしないとねー。期待して構えてて」

「そこは“待ってて”でしょ！ 構えさせないでよ！」

朝から元気だな、と思いつつ魔王はエストレイアに背を向ける。

「いつまでもこうしているわけにはいかない。私たちは行くぞ」

「うん。呼び止めるつもりはないよ。また会えるしねー」

「ああ。またな」

「またね、エストレイア」

「失礼します。またお会いしましょう」

「うん。またねー」

そう言っつてエストレイアと別れる。

魔王とクリステイーナは軽く手を振り、セシリーは一礼してヴァナデイスの方角へと歩き出す。エストレイアの方は腕を子供のように大きく振って魔王たちを見送った。

一柱の神と出会い、魔王とクリステイーナは解り合えた。仇敵同士が手を取り合ったことの意味。本来なら成し得ないこの行動は、始めにして大きな一歩になるだろう。魔王はそう信じる。

いつか、きつと……。

魔王は旅の一步を踏み出す。今になつて最初の一步を。

目指すは、ヴァナデイス神殿国。

魔王たちが見えなくなるまでエストレイアは手を振っていた。

見えなくなり、腕を下ろす。それを待っていたかのように力天使が近づいてくる。

「いかがでしたか。今世の魔王は」

「うん。予想以上だよ」

エストレイアは満足気に頷く。

エストレイアは“魔王”について個人的に調べていた。

『ディオ・リナ』には誕生する生物が決まっている。存在する生物から変種に成る可能性を含め、『ウィルフレド・イマ』では全て把握している。『ディオ・リナ』の管理業務を行う神だからこそその知識だ。

しかし、その知識の中に“魔王”はない。

魔王を名乗る魔族や人間の存在は予測されてる。だが、“魔王”という存在は認知されていても把握はされていない。神でさえも全く正体不明の存在なのだ。

だから、エストレイアは知りたかった。会って、理解したいと思った。

そして得たのは、

「楽しいなー」

エストレイアは本当に楽しそうに呟く。それは子供が誕生日にプレゼントを貰った時に見せるような笑顔。

「『ディオ・リナ』の規格外の存在　魔王」

エストレイアは見えなくなった魔王の背中を見る。

「次は一体何を見せてくれるのかな。魔王くん」

『ウィルフレド・イマ』の神はいつまでもその背を見続けた。

## 第12話：入国

「剣の稽古をつけてほしい」

時は正午過ぎ。早めの昼食を取ってから、休憩しているクリステイーナに魔王は言った。

木にもたれながら水を飲んでいたクリステイーナが水筒から口を離す。

「突然ね。どうしたの？」

「今の私は魔術でも剣術でも中途半端だ。魔術は無理だが、剣術なら鍛えれば何とかなる。だから、稽古をつけてほしい」

これは以前から魔王が思っていたことだ。

魔王の剣術は素人そのもの。それに反して、魔王の今の身体の主である人間クルスは優れた二刀流剣術の持ち主だ。記憶越したが、素人の魔王から見ても凄いの一言である。どれだけ素晴らしい剣の腕を持つ身体とその知識があろうとも、使いこなせなければ意味がない。

「ふーん。まあいいわよ。食後の運動ってやつね」

快くクリステイーナから了承を得る。

水筒を地面に置き、立ち上がりながら愛剣に手をかける。

「それならば、わたくしにも稽古をつけてもらってもよろしいでしょうか」

魔王の影からセシリーが出てくる。セシリーはいつどこで人間に

遭遇するか分からないため、常に魔王の影で生活している。現在は見渡しの良い平原で、人どころか動物すら見えない。

「わたくしも大戦から暫く剣を握っていませんので感を取り戻させてください」

「いいけど、剣は？」

クリスティーナの一言でセシリーは、しまった、という顔をする。

「そういえば持っていませんでした。大戦時に紛失してしまいましたので」

「それならわたしの使っていいわよ」

そういつてクリスティーナは自分の剣をセシリーに手渡す。魔王はその行動に驚き、セシリーもクリスティーナと剣を交互に見ている。

「クリスティーナはどうするんだ？ まさか素手でやるつもりか？」  
「まさか。…….…….こうするだけよ」

クリスティーナは両掌を広げると、そこにシフィアの魔法陣が浮かび上がる。太陽と月が白く発光し、同色の物体が魔法陣から出てくる。

空中で静止したそれをクリスティーナは掴む。

掴んだのは白い剣だった。光で作られたかのような白一色で出来た剣。片手に一つずつ握り、それらしい構えを取る。

初めて見るクリスティーナの二刀流の構えに魔王は感心する。

「そんなことも出来るのか」

「剣なら魔術でいくらでも作れるわよ。普段の剣よりは劣るけどね。」

「……………それじゃ」

始めましようか、というクリスティーナの言葉で稽古が始まった。

「はあはあ……………」

魔王は膝に手を置き、息をつく。嫌な汗が流れ、袖で拭う。しかしすぐに新しい汗によって顔が濡れる。

短時間による激しい動きで魔王の体は疲労を訴える。対して、クリスティーナは汗一つ流れることなく平然としている。

「はあっ！」

セシリーがクリスティーナの背後から素早い動きで攻める。だが、クリスティーナはひょいと体を横に動かしただけでそれを避ける。セシリーはそれでも体勢を整えて正面から斬りかかる。それをクリスティーナは片方の剣で軽々と受け流した。かと思えば、セシリーの体が宙に投げ出される。もう一方の剣で吹き飛ばされたのだと判った時には、セシリーは地面を転がっていた。

「剣が基礎に忠実過ぎる。それで行きたいならもつと速く動きなさい。だから攻撃が簡単に読まれるのよ」

「は、はい！」

「次！」

呼ばれているのが自分のことだと判り、魔王は駆ける。

右から上段に斬りかかる。同時に左の剣で横に一閃する。クリスティーナは顔色を変えることなく両の剣であっさり受け止める。そ

して罅迫り合いになる。剣を押ししてもびくりともしない。そんな魔王の腹をクリステイナは蹴り上げた。

「がっ・・・・・・・・！！」

予想外の攻撃に魔王はよろめく。完全に体勢が崩れた魔王にクリステイナが斬りかかる。ほんの一瞬の内に魔王の剣を弾き、喉元に切先を突きつけられる。

視界に入らないところで手から離れた剣が落ちる音を聞く。

「・・・・・・・・参った」

「動きが単調で遅い。剣筋が正直すぎるし、何より集中力が足りてない。剣ばかりに意識を向けているから他の攻撃に反応できないのよ」

「く・・・・・・・・」

魔王は悔しさに歯噛みする。

クリステイナの言うことは全てが的確だった。魔王には剣の戦いに必要なものがあらゆる面で足りていない。

剣の知識は基より魔王の持つ身体が憶えている。それを活かせるだけの術を持つ身体を魔王は使っている。

しかし、魔王はうまく扱えない。魔王自身今の戦い方が良かったとは思えない。それが解っている。解っているが、行動に繋がらない。どれだけ素晴らしい身体を使おうとも、それは人間クルスが磨いたものだ。完成されたものを受け継いだところで、今まで剣を握ったこともろくなかった魔王が、すぐに使いこなせるわけがない。

それに、魔王が身体を失う前の基本戦術は魔術を行使する前提のものだ。相手の気配、攻撃、防御・・・・・・・・全て魔術で察知し、対策を打ってきた。今に思えば依存に近かったのかもしれない。現に魔術を失った魔王は手加減して戦っているクリステイナに手も

足も出ない。

「セシリーは見てるだけだとそこまで問題ないわね。後はスピードと、基礎剣術を意識し過ぎなのを無くすること。基礎も大切だけどそれ以上に応用を利かせないと意味がないから」

「はい。わかりました」

「クルスは問題ありません」

「返す言葉もないな」

クリスティーナの指摘に魔王は気まずさから項垂れる。

「あなた、攻撃する時に何考えてる？」

「？ 当然当てることだが……」

何を言っているのだろう、魔王が首を傾げていると、クリスティーナが溜息をつく。

「どこにどう当てるとか考えてないでしょ」

「考えている。今は上段から斬りかかりながらもう一方の剣で攻撃」

「その後？」

「え」

「その後どうするか。具体的に考えてる？」

問われてから魔王は思い出す。

魔王は確かに具体的な攻撃方法が後にあったとは言えないが

「だが、相手がどう動くか分からないのだから具体的な攻撃が思い浮かぶわけがないだろう？」

「相手の動きを予想するのは勿論だけど、相手を自分の思うように

動かせるに誘導することを考えて攻撃しないと」

「そんなことができるのか？ どうやって……？」

「そうね……もし、上段から思い切り斬りかかられたらクルスはどうする？」

突然の例題に魔王は考える。

そして導き出した答えを口にする。

「避ける、な」

「どっちに？」

「どっち？ ……右に避ける」

「ほら」

「何が、“ほら”なんだ？」

言っている意味が解らないという顔をする。

「まず、この攻撃の対処法としては避けるか受けるかね。これは誰でも分かることよ。だから避けるか受けるかの二択の行動に誘導することができる。そしてその後の行動が制限される。避けるなら右か左か後ろ みたいに。そうやって自分のペースに相手を持っていく。攻撃はそういったこと全てを考えてやらないと」

「………成程」

「当然、全てが予想通りとはいかないわ。でも考えなしの行き当たりばったりな攻撃より、思考しながら攻撃した方が良いに決まっている。今のクルスのように力が劣っているなら尚更。実力で勝てないなら、知恵で勝る戦いをしないと」

クリステイナーの解説で魔王は納得した。

魔王は強大な存在だ。今までの戦いでも敵の殆んどは一撃で葬ってきた。だから、そこまで具体的に攻撃方法について考えたことが

なかった。

「その通りだな。とても勉強になった」

「そう？　なら、もう一度いくわよ」

「やり方さえ分かればこちらのもの。次はさっきのようにはいかなぞ」

魔王の言葉にクリスティーナは不敵に微笑んだ。

クリスティーナから身体の動かし方や小手先のテクニクを軽く教わった。本当に、軽く。基よりそういった手法は人間クルスの記憶として魔王にも備わっている。それをどううまく引き出し、実戦で使用かは、今後の魔王次第だ。

教えられたのは、殆んど基本的な心構えや考え方が中心だった。それこそ剣術に限らず、生きていくことにまで応用できそうなことだ。………勿論、使えればの話だ。

「早く宿で休みたい」

『頑張ってください。魔王様』

「………お前は楽でいいな」

結果的に魔王は負けた。満身創痍だ。フェルミアにあっただばかりの頃の修行を思い出しかけて頭を振る。

あれに比べれば………。

「ほら、見えたわよ。………何て顔してるの？」

「いや、何でもない………」

魔王は過去のトラウマに呑み込まれそうになっているところで、クリスティーナの指した方を見る。

魔王たちが立っている平原よりもずっと低い位置。その切れ目が境界線のように、自然に恵まれた平原から荒れた大地へと変わっている。そんな荒野の中心に聳え立つそれは、目的の“国”だった。

強固な壁に覆われ、その天辺は不規則にでこぼことしている。中には石造りの建造物が多く見られ、その中心には教会堂のような巨大な建造物が鎮座していた。更に、その教会堂から国の周りに囲まれた壁へ線となった石がいくつか繋がれていて、国自体がまるで一つの家のようだ。どれも歴史を感じさせるものばかりで、何から何まで儀式めいていると感じられた。

ヴァナデイス神殿国。

その名前を知っていれば、確かにこれは“それらしく”見える。しかし、魔王には目の前の国が城塞としか思えない。

「胡散臭い国だな」

「わたしも初めて見るけど、何か近寄り難いわね」

魔王とクリスティーナが率直な感想を述べる。

見かけ通りヴァナデイス神殿国は歴史が長い。だが、その割りに発展らしい姿が皆無だ。国よりは古い遺跡と呼んだ方がまだしっくりくる。

魔王たちは荒野の中で数少ない舗装された道を見つけてヴァナデイスの門を目指す。

以前の魔王でも通れるくらい巨大な門と扉。国を囲む壁も大きければ、その入り口も強固だった。

門に辿り着くと門番の男が近づいてきた。兵というよりは修行僧といった感じの男があからさまに不審な目で魔王たちを睨むように見る。

「入国許可書はありますか？」  
「ああ。これだ」

魔王たちはエストレイアに貰った入国許可書を門番に手渡した。門番は一通り目を通した後「少しそこで待っていてください」と言っつて門の奥へ消えた。不審な目は最後まで消えなかった。

まあ、無理もないか。

このご時勢に若い男女がいきなり国に押しかけてくれば誰でも不思議に思う。商人でもなさそうな国籍不明の男女が、有力者や名のある組織からしか貰えない紹介状を携えてくれば尚更だ。

「渡しただけで何も言わなかったけど、大丈夫かな？」  
「何とかなるだろう」

暫く待つと、門番が現れる。動きはゆっくりだが、何故か困惑しているような顔をしている。

「入国の許可が下りました。お二人はすぐに中央にある教会を訪れてください」

「すぐに？ 何でまた」

「この国では外部の人間にガイドが一人ずつ付いてくるのか？」

魔王はほくそ笑む。

その場合、監視という意味のガイドだろうか。

門番は困った様子で魔王たちの質問に答える。

「その、私にもよく分からないのです。お二人の名前を聞いて大司祭がすぐに呼んでくるようにと……」

「大司祭？」

「この国一番の権力者ね」

クリステイーナの名前がヴァナデイスに知られていてもおかしくない。寧ろ当然と言ってもいい。交流がなかったとはいえ、大戦で両親を失ったクリステイーナが王を引き継ぐのは誰でも解る。正式な発表がなくても。

それにしても、と魔王は思う。手回しがあまりにも良過ぎる。魔王たちが最初からここに来ることを、ヴァナデイスには分かっていたということになる。

まあ、それならそれで……………。

「都合が良いな」

「そうね。最初から会うつつもりだったし」

「お二人は一体……………」

門番が驚いた顔をする。この国の住人といえど、魔王を倒したクリステイーナの顔までは知らないらしい。

「さて、案内してもらおうか。その大司祭とやらのところに」

魔王たちは門を潜った。

### 第13話：神（2）

門を潜ると、外見通りの石造りの街が広がっていた。

路肩に商店が並び、それを通行人が眺めたり商品を手にとったりしている。子供たちが走り回る。商人たちが慌ただしく道を行き来している。外から見れば遺跡のように閑静としていた城砦も、人がいるだけで全く印象が違う。

どこの国とも変わらない人の溢れた雰囲気。そんな街並みを眺めている内に目的地に着いた。

他の建物と同じ石造りの儀式場。しかし、床から屋根、壁や窓に至るまで手の込んだ造りが施された建物は、それそのものが一つの作品に思えた。壁や窓には芸術的な絵が描かれ、床と天井には見たことのない文字や記号が目立たないように刻まれている。

ヴァナデイス神殿国の中心部に建つ教会堂。

最初から開かれていた扉の奥に待ち人はいた。

「どうですか。街の様子は」

出迎えたのは初老の男だ。派手とも地味とも言えない装束を纏っているが、慈悲深いオーラを全身から流すような不思議な感覚を受ける。その格好から目的の人物であると容易に分かった。

教会堂の中へ入ると、まるで友人と話すかのような態度でその男は言った。

「賑やかで楽しそうです。わたしの国と変わりません」

「そうですね。平和な国ならどこでも見れる光景ですが、残念なことには全ての国が平和ではないのが現実です。何故でしょう?」

「みんなが平和を望んでもそれが叶わないから」

「その通りです。平和を望む者がいると同時に戦争を望む者もいま

す。……『ディオ・リナ』全員の信教が同じならどれだけ良いことか」

「それは難しいですね。誰もが同じ願ねがいではいられない」

だから、戦いはなくならない。

『ディオ・リナ』を生きる者全てが平和を望んでも、その国、その人によって“平和”の形は違う。

自分と自分の周りの人間が幸せならそれで良いという者。自分の国が裕福であるためなら隣国が滅んでも良いという者。人間が無事に暮らせるならそれ以外の種族は絶滅しても良いという者。

先の大戦がそうであったように、必ずしも人々が口にする“平和”が共通しているとは限らない。それこそ、『ディオ・リナ』で暮らす者全てが同じ信教でもない限りは。

そうですね、と男は悲しそうに呟く。

「挨拶が遅れました。私はヴァナディース神殿国の大司祭ルクソースです。ようこそいらっしやいました」

「シフィア 元シフィア王国の王クリステイナです。突然の訪問をお許してください。こちらは」

「魔王、ですね」

「!?!」

魔王とクリステイナは共に絶句する。それでもルクソースと名乗った大司祭を態度を崩さない。

「どうして……」

「エストレイア様から伺っております。敵意は全くないと」

「……それでも、こうしてあっさり入国させることに危険だと感じないのか？」

弱体化しているとはいえ、魔王は魔王国の王。どんな策略をめぐらせているか分かったものではない。エストレイアから話を聞いていたからといって、普通はあっさり入国させることはなってはならない。見えないところで何らかの対策を行っているだろうが、大司祭からは何かをしたという様子が見られない。

「神を信じるのがヴァナデイスの教えですから」

嘘を付いているようには見えない。だからこそ、魔王が目の前の大司祭を怪訝に思う。

「こちらへ」

魔王の気持ちに気づかず、ルクソースは教会の奥へと歩き出す。促され、魔王とクリスティーナはその背を追う。

何の変哲もない壁でルクソースは立ち止まり、ほんの少し出っ張った壁のタイルを押す。すると、ルクソースが押したタイルの下の方に逆三角形の光が浮かび上がり、壁が左右横に自動で開く。

現れたのは狭い部屋だ。二、三人くらい入れるのがやつとの空間。天井だけ少し高く、そこから太陽の光を直接浴びせているかのような光明が差している。

「入ってください」

ルクソースが道を空ける。

魔王がクリスティーナに目だけで「大丈夫か？」と訊ねる。クリスティーナはなるようになれと言わんばかりの呆れた反応を返してきた。クリスティーナが先に進み、次に魔王が入る。それに止まることなくルクソースが続いた。魔王の危惧は杞憂に終わったが、まだ油断は出来ない。

ルクソースが今度は部屋側からタイルを押すと扉が閉まる。閉じると同時に軽い浮遊感を味わう。落ちている、と気づいた時には浮遊感は自然と消えていた。

「着きました」

「どこへ連れて行く気だ」

「この奥へ行けば分かります。……今日は貴方方にとって記念になる日になるでしょう」

扉が開かれる。

扉を潜った先にあつたのは広い空間だ。教会のように壁や天井、柱に至るまで細かな造りとなっている。

しかし、造りの種類が違う。教会が神に祈る場所だとすれば、ここは王を崇める場所だ。

広い空間の奥には玉座があつた。そこへ続く壁には翼の生えた騎士たちが並んでいた。騎士に護られる王は魔王たちを見て微笑んだ。騎士は天使。

王は神。

神は玉座から立ち上がる。

「ようこそ、我がヴァナデイス神殿国へ。ワタクシの名はフレイアース。アナタ方の入国を歓迎します」

玉座の前で出迎えたのは二十代後半くらいの女性。身に纏っているのは、高価な布を使った衣装。同じ神でもエストレイアとは対照的に露出を許さない格好は、全身で潔癖症を表しているかのようだ。その衣装だけで軽く一般家庭の数ヶ月の生活分の費用がかかるだろう。

「神……ですか？」

クリステイナーがおそろおそろ訊ねると、フレイアースが頷く。

「その通りです。ワタクシは『ウィルフレド・イマ』を統べる神の一柱。エストレイアから話は聞いていませんか？」

「まったく……」

「もう、あの子にも困ったものです」

呆れた顔で溜息をつく姿はまるで母親のようだ。

エストレイアと違い銀色の長髪だが、容姿はどこどなく似ている。同じ神だからか、雰囲気もエストレイアと同じ感じだ。

「どうして神がこんなところにいる？」

「どうしてと言われても……。管理すべき世界に拠点を置くことがそんなに不思議ですか？ 我々は『ウィルフレド・イマ』から眺めるだけが仕事ではありません」

「はっ。自分のことをヴァナダイスの連中に崇めさせてよく言う」

ヴァナダイス神殿国は神を崇める宗教国家。目の前の実在する神を崇める信仰だ。本当にエストレイアから聞いていたような仕事なら態々そんなことをする必要はない。

魔王の言葉にフレイアースが不快な顔をする。

「ちょっと、クルス！」

「魔王、貴様……。フレイアース様を愚弄するののか！」

クリステイナーとルクソースが慌てて止めに入ると、フレイアースが片手を挙げて制す。

「そんなに神われわれのことが憎いのですか」

「憎む？ 何の話をしているんだ。憎む必要がどこにある、傍観者。私はただ、神の力をもつと良い意味で『ディオ・リナ』の役に立てられないものかと嘆いていただけだ」

「まるで子供ですね」

「最近私も丸くなつたらしい」

心底疲れた顔でフレイアースは魔王を見る。

「妻があれなら旦那も同じですか」

「なんだと？」

フレイアースの呟きに魔王は眉を顰める。

「フェルミアのことですよ。あの乱暴娘の」

「フェルミアに会ったことがあるのか!？」

魔王は驚きを隠せない。神に会ったことがあるなど、フェルミアの口から聞いたことがない。

「五十年程前でしょうか。一度この国を単身で襲撃してきました。当時の司祭たちを薙ぎ倒し、教会を半壊させ、更にワタクシの護衛の天使たちも全滅させられるという被害を受けました。死人が出なかつたのが不思議なくらいです」

「何をやっているんだあいつは……」

「それからワタクシに剣を突きつけて国を造るにあたり必要なことを訊いてきました。ワタクシがヴァナデイスの創設者であることを知っていたようですね」

「……」

魔王国の創設はフェルミアから始まった。フェルミアが建国する

発端を作り、その立役者に魔王を選んだ。“国”というものすら口々に解つていかなかった魔王を、影で支えたフェルミアは魔王国の裏の立役者だ。

その建国を一から始めるにあたり、フェルミアの行動は全てとまでいかなかったが、手際が良かった。それは過去に国を一から創設した人物から指導を受けたからだ。目の前の神によって。

やりたいことのためなら神にさえ喧嘩を売る。……

何ともフェルミアらしいな。

合点がいつて魔王は自然と綻ほころぶ。

「よく素直に教えたな」

「純粹に平和な国を造りたいという想いに、偽りはなかったようですから。それに、損害分の費用も置いていってくれたのでこちらとしては特別損はしていませんよ。寧ろ警備体制について改めて考えさせられたので良い勉強になりました」

「平和な国……」

クリステイーナが魔王の横で静かに呟く。魔王自身もそんな昔から行動していたのかと感心している。

「フェルミアのことは懐かしいですが、そろそろ本題に入りませんか？」

本題。

魔王とクリステイーナがヴァナデイスを訪れた理由。

魔王がクリステイーナの方を見ると、頷いて返してくる。そして魔王はフレイアースに言った。

「ヴァナデイス神殿国に頼みたいことがある。私の 魔王の身体を破壊してほしい」

ヴァナデイスに来る前に魔王とクリステイナーで考えたことだ。魔王の身体は争乱の原因になる。封印された魔王の身体が存在する以上、今回のシフィアのような国がまた出てくる。魔王自身が身体を取り戻しても同じこと。再び魔王国のような悲劇を、魔王がいる場所で引き起こすだけだ。それならば、原因となる魔王の身体を破壊してしまえばいい。誰かが魔王の力を手に入れる前に。・・・

・ 現在ここにいる魔王には何の価値もないのだから。

魔王の言葉にフレイアースは驚く顔を隠さない。周囲の天使たちからも息を呑む感じがする。

「意外です、ね。身体を取り戻すかと思っていたのですが」

「こちらの身体に慣れてしまったからな。あの図体では生活が難しい」

「ふふ。それがあなたの答えですか」

フレイアースが口元を手で隠す。魔王の答えが余程おかしかったのだろう。

「わかりました。あなた方の提案を受け入れます。 ヴァナディ

ス神殿国は魔王の身体を破壊することに全力を尽くします」

「あっさり了解してくれたのは嬉しいが・・・ 本当に良いのか？」

「勿論です。神の言葉に、偽りはありません」

自信を持ってフレイアースは言い放つ。その態度に魔王は少しだけ安堵した。

「しかし、その提案は簡単ではありません。問題は山積みです。問題を解決するにはやらねばならないことが沢山あります」

「そうだな。それにはまず」  
「ですから、話の続きは明日からとします。本日のアナタ方には旅の疲れを癒してもらいます。疲れた頭では出る案も出なくなりませんからね。それに、ワタクシ自身にも考える時間をください。問題が問題だけに、慎重にならねばなりません」

魔王の言葉を遮り、フレイアースは言った。

フレイアースの言う通り、魔王たちは疲れていた。エストレイアとの出来事もあってあまり寝ていない上に、ヴァナデイスに到着した足でここへ訪れている。大事な話だからこそ、万全の態勢で挑まなければならぬ。

「わかった。続きは明日にしよう」

「感謝します。宿に案内させましょう」

フレイアースがルクソースに指示を出す。この国の地名と宿名を告げていたようだが、ヴァナデイスを今日初めて訪れた魔王には全く分からなかった。

ルクソースが律儀過ぎるお辞儀をフレイアースにしてから退室しようとする。その後ろを魔王とクリステイーナは続いた。

「クリステイーナ姫」

「は、はい。何でしょうか？」

いきなり呼び止められてクリステイーナは慌てて振り向く。

「少しだけ、二人きりで話したいのだけれど、よろしいでしょうか？」

チラッと魔王の方を向く。

「行ってこい。宿で待ってる」

「はい。わかりました」

クリステイーナは目だけで、わかったと告げてフレイアースに返事する。

魔王は先に宿に帰るために退室した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9585v/>

---

堕ちた魔王の理想郷

2011年10月12日02時59分発行